

原文筆写 草稿

田中道全集

田中道磨翁顕彰会
養老町教育委員会

平成十九年十月

田中道磨翁肖像画（本居宣長記念館蔵）



「あいさつ」

養老町は古くは多藝郡と呼ばれており、はるか昔から多くの先人の努力によって発展し、今日の養老町の姿を築いてきました。中でも養老町を今も西南濃一帯の低地部において洛水の重要性は高く、宝暦年間には遠く鹿児島薩摩藩士が当地域で洛水工事を行っています。この工事は宝暦洛水工事と呼ばれ、現在においても工事に携わった薩摩義士の遺徳を偲び、養老町においても様々な取り組みを行っています。この度刊行する田中道全集の著者である田中道磨翁はちようどこの頃三十歳であり、現在の養老町飯ノ木でお生まれになりました。幼少の頃より向学の志厚く、独学で国文学に傾注され、その発展に大きく寄与し、今日の国学の礎をつくられた養老町が誇る先人の一人であります。

養老町では田中道磨翁の功績を顕彰し、永く後世にその名を伝えるため、昭和三十二年七月田中道磨翁顕彰会を結成し、長く田中道磨翁の顕彰を行って参りましたが、この度田中道磨翁の歌集である「田中道全集」を現代読みに直した「原文筆写 田中道全集」を刊行することができました。田中道全集の解説は国学の研究において大きな課題とされてきたものであり、田中道磨翁生誕の地である養老町からこうした成果を公開し、後世に偉大な功績を伝えることができることは望外の喜びであります。

本書がより多くの方々に利用され、そして私たちの町に先生の後継者となるべく第二・第三の学問を志す人物が現れ、いつまでも養老町が繁栄することを願いまして「あいさつ」とさせて頂きます。

平成十九年十月

養老町田中道磨翁顕彰会

会長（養老町長） 稲景貞 二

例言

- 一、本書は田中道麿翁の歌集「田中道全集」を原文筆写したものである。
- 二、原文筆写にあたっては鈴木服学会二〇〇三「田中道全集」『文莫』第二十六号を基に、田中道麿翁顕彰会副会長山口一易が行った。
- 三、解説にあたっては鈴木服学会二〇〇三「田中道麿集」『文莫』第二十五号及び本居宣長記念館主任研究員吉田悦之氏より提供して頂いた資料を参考とした。同資料は若田隆氏の多年にわたる研究を踏まえたものであることを附記しておく。

原文筆写にあたって

- 一、改行・仮名遣い・送り仮名・漢字・見せ消し・記号は原文どおりに行い、変体仮名については平仮名に変更した。
- 二、解説ができなかった文字については、原文を参考に横写して記載した。
- 三、歌の先頭に記されている漢数字の整理番号は全て算用数字に変更した。
- 四、三百十九及び三百八十五番の歌について、原文では張り紙がとれていたため、本居宣長記念館主任研究員吉田悦之氏より提供して頂いた資料を基に復元した。
- 五、歌と添削・傍注などの書き込みを区別するため、歌については毛筆、書き込みについてはボールペンを用いて記述した。

目次

| | | | |
|-------------------|-------|------|-----|
| 宝曆 七年 (一七五七) | 田中道磨翁 | 三十四歳 | 二頁 |
| 宝曆 八年 (一七五八) | 田中道磨翁 | 三十五歳 | 三頁 |
| 宝曆 九年 (一七五九) | 田中道磨翁 | 三十六歳 | 四頁 |
| 宝曆 十年 (一七六〇) | 田中道磨翁 | 三十七歳 | 五頁 |
| 宝曆十一年 (一七六一) | 田中道磨翁 | 三十八歳 | 五頁 |
| 宝曆十二年 (一七六二) | 田中道磨翁 | 三十九歳 | 七頁 |
| 宝曆十三年 (一七六三) | 田中道磨翁 | 四十歳 | 八頁 |
| 宝曆十四年即明和元年 (一七六四) | 田中道磨翁 | 四十一歳 | 八頁 |
| 明和 二年 (一七六五) | 田中道磨翁 | 四十二歳 | 九頁 |
| 明和 三年 (一七六六) | 田中道磨翁 | 四十三歳 | 十頁 |
| 明和 四年 (一七六七) | 田中道磨翁 | 四十四歳 | 十頁 |
| 明和 五年 (一七六八) | 田中道磨翁 | 四十五歳 | 十一頁 |
| 明和 六年 (一七六九) | 田中道磨翁 | 四十六歳 | 十三頁 |
| 明和 七年 (一七七〇) | 田中道磨翁 | 四十七歳 | 十六頁 |
| 安永 五年 (一七七六) | 田中道磨翁 | 五十三歳 | 十九頁 |

| | | | | | |
|----|---------------|-------|------|-------|------|
| 明和 | 八年(一七七一) | 田中道磨翁 | 四十八歲 | ．．．．． | 三十六頁 |
| 明和 | 九年即安永元年(一七七二) | 田中道磨翁 | 四十九歲 | ．．．．． | 五十二頁 |
| 安永 | 二年(一七七三) | 田中道磨翁 | 五十歲 | ．．．．． | 六十六頁 |
| 安永 | 三年(一七七四) | 田中道磨翁 | 五十一歲 | ．．．．． | 六十八頁 |
| 安永 | 四年(一七七五) | 田中道磨翁 | 五十二歲 | ．．．．． | 六十八頁 |
| 安永 | 五年(一七七六) | 田中道磨翁 | 五十三歲 | ．．．．． | 七十頁 |
| 安永 | 六年(一七七七) | 田中道磨翁 | 五十四歲 | ．．．．． | 七十二頁 |
| 安永 | 七年(一七七八) | 田中道磨翁 | 五十五歲 | ．．．．． | 八十一頁 |
| 安永 | 八年(一七七九) | 田中道磨翁 | 五十六歲 | ．．．．． | 九十二頁 |
| 安永 | 九年(一七八〇) | 田中道磨翁 | 五十七歲 | ．．．．． | 九十三頁 |
| 天明 | 元年(一七八一) | 田中道磨翁 | 五十八歲 | ．．．．． | 九十九頁 |
| 天明 | 四年(一七八四) | 田中道磨翁 | 六十一歲 | ．．．．． | 九十九頁 |

表紙

壯觀集三十八

草稿
田中道全集

壯觀集一所持者の当地方の学者歌人の

集を集めて命名した然ると思われ

(文藝二十六年)

裏面に

○点 植松茂岳傍注トモ目シ

本居大平考モアリ 本書大平添削

ニ付 其傍書字 今の朱傍注ハ茂岳也

宝曆七年丁丑詠草

濃人 田衢

八月十五夜あふみの海に月を見侍りて

○ 秋のよの今宵は鳩の海へにもみるめのしけき月の影哉
同じ時に千之先生のうた

名にしおふ不破の閑屋の里人に鳩照月も影みかく見

2 月前鴈

○ 月の船のみそらの海(を)ききゆけは声(を)ほにあげて雁渡るみゆ

3 社頭月明

○ 尋入る道も迷はし秋の夜の月さやかなる三輪の神杉

4 君かすむ山里はいつこそと問給ふる人にこたふ

5 光陰速なほ

○ 老人の若ゆてふ名の滝のせはわか住里に流氷こそすれ

6 雪中時鳥

○ 花ちかし枝ももみちて唐錦たつ事やすき月日成かもし

7 煙十字

○ 絶さなる富士の裾野の時鳥雪けの空にねをや鳴くらん

8 北行月

○ 煙たつ浅間か獄の横雲はいつれをさきにみやかむへき

9 雪中早苗

○ 北へ行月とやみらんかたより矢橋をせして帰る舟人

10 山 月

○ よみわけて早苗とら也卯の花の門田の水に雪とふれるを

11

○ 幾あまか月はくもらてあふみのや鏡の山に影うつすらん

13 12
千之に奉る。○滝川の流をとめてとひこかし共に八千代をせ若えつゝみん
千之のかへし 春行て共に汲む迄滝の水のたのみおとしかけてわするな

同八年戊寅

千之此春見（たまはせりけれは）

頼こし春は暮にき田跡川の滝もや君を待つゝあらん

16 15 14
野外秋露。○あきふかみ野への錦のかせそひて草の葉こにおける白露

野亭秋圃虫。○サ律生て荒たる数のきりくすいも枕の下にこそなけ

千之先生の秋もまたいたり玉らぬ此頃の音し音せぬ秋の

上風とよみ玉ふと羨て

○人とはねわか宿なから秋きては音信そする秋の上風

18 17
正月より五月まで旅にありて

○春とともに立けるものを旅衣花橘の香にそむる哉しみける

歳暮。○若ゆてふ名におふ滝の流にも年をとむる柵そなき

同九年己卯

立 春。田跡川の瀬々の氷もけふとけて春はきにけり多芸の野の上にはやう近江の国に行てあそびし時常に千之先生の許にありけるを今は尾張の国にうつり住て先生をおもひて

○ あふみてふ名はいにし(に)うつりゆきてあはての森に恋つそふる別水つあはての森の露霜にぬれてかはかぬ我袂哉

千之かへし
旋頭歌
○ おもひきやあはての森のあはてのみ空行月にあくかれんとは麻衣木曾路の川の水がう増れりいせの海清き流に塩みつらんか

秋浅向泉
○ 笠並のひらの山風かせをいたみかも百不足八十の湊に千鳥鳴なる秋萩の下葉もいまたうつろはて水にうつれる影ぞ涼しき

白題鶏鳴也
題しらす
○ かりにたつ君やこきらん待わひて深草野へうつら鳴なり
○ いつとくいつもの花は川水にみかくれてのみ白ふくなり

重 陽
○ なみひそと契りし物ををはるの梅田の橋のた(に)けるかも
○ 住吉の春の浜へも雁鳴て菊の花さくけふにしかめやも

旅宿暮秋
○ きりぎりす旅の枕にしはなきて夜寒の里に秋は暮にき

31 初秋。秋まゆとまたきしられて白妙の我衣てそ霧けかける

同十年庚辰

32 遠日待恋

またしとも思ひすてなていくはくのこぬよを我はあかしきつらん

33 契待恋

ちきりこし廿日の月の出しほもまた宵なから立またれつ、

34 五月雨

けふいかける、時なく久買の空そみたる、かつらきのやま

35 森 蟬

衣手のもりの梢になく蟬のあつさにとともに土声そまされる

36 旅宿時鳥

さなきたに古郷恋る夕暮に思ひをそふる山時鳥

同十一年辛巳

36 立 春

みねに生る松のみどりも色そひて稲葉の山に春はきにけり

37 閑早春

名にしおふ閑は霞にうもれて武蔵の野へに春はきにけり

38 野 梅

梅の花白ふ春へは告すとも飛火の野守出てこそみめ

39 寄 硯 恋

かそふへき命や霞と消なまし硯の水のたへてあはすも

40 春 月

大原や鏡の水は春の夜の月を宿せる名にこそ有りけれ

寄硯恋

徒らにならず硯の海はあれとみるめなきこそわひしかりけれ

花濃山

みよしの山は桜に埋れて春は青根も名のみ也けり

彦根ろとくるむ

月次の会席の諸君によみて奉ずる 四月九日

43

かへし

「元」さしなる関の藤川越て君花の円居とするそ嬉しき、
越きつる関の藤川替らしな深き心を波てちまはらは 氏愔七郎
おもひきや春に聞へし滝波を花にそそきて円居せむは 覚勝寺
みぬさきに名をしるや中絶し人に又あふ心地こそすれ 専宗寺
了観

44

池山吹

池水にうつれる影の元ならぬはいはてせたに山吹の花

45

待時鳥

峯におふる松としらてや来ながぬはいつちいなほの山時鳥

46

寄蛙恋

おもひねの我を人まね蛙さへあかしかわつて夜た、啼らん

47

残雪

伊吹山林鹿の里は卯の花のせけとも峯にのこる白雪

48

折句

春日山さよくてらせる月影も春と霞の立かくしつ、

49

甥なるものを津の国につかはしおきて

今もかも難波のみつて海風に飽つて、独もしほたるらん

50

ある夜はに

○ 難波かた芦のかりねの短よもあかしかわつ、世を渡ららん

がきみとを有しまにイカく夢夕に見てみつ、覚しねさめのいこそねられね

52

九月尽

○ いつか木このこの葉の散過てけふと暮行秋をしそおもふ

ありとたに人こそしら相栗の花さけとおのれと色香なけれは

53

和る歌

○ おのつから人こそしらめ栗の花秋の梢にみやはならさる

同十二年

壬午

54

立春

住江イカなる浅間の山もけふとてや煙とともに春は立らん

ふる年のひかりながらに久かたの光のとけき春は来にけり

55

子日

○ 栄巾ヘキ君が例に引松の子日や千世の始はらまし

今もかも雪まをわけて古郷のたきアサヤの、野へに若なつむ見

56

若菜

○ 春の雨秋の時雨と手を折すわが身よにふる教にそ有ける

いつしかに谷の戸いて、梓弓春たつけふの鶯のこゑ

57

早春鶯

○ みかめかる鳴海の浦を朝和に教なく通ふあまの釣舟

春の風花をなふきそねおのつからちらん日教も久しけなくに

61

題しらす

○ 春の風花をなふきそねおのつからちらん日教も久しけなくに

62 63 64 65

松声入庵琴

難波津躰

歳暮

このねのきこゆる宿をしるこトトハス。にやとめてそ通ふよはの松風
 なつ山に鳴時鳥忍ひねに今は五月と鳴くほととぎす
 〇 といはあれと罨の春を隔つ、いやをしまる、年の暮哉
 〇 をしめとも年の暮行きこといほの中もかひやなからん

同十三年 癸未

元日 〇 古年はきのふのゆふへ暮果ぬけふの朝の春そのときき

卯月にはこむと契りし人に遣しける

卯月こそ来んトハントネシ人ニヨリといひてし契りより今年は春のをしけくもなし

千之返し あふことは夏の、草の霜かれて秋も末葉となりけるかな

とて九月六日に来り玉へり

歳暮 年波を爰によせきぬ旦トノヒカクシ此けふはかりとや田鶴の鳴見

69

同十四年 即明和元年 甲申

千之先生に武蔵によみてつかはしける

東路の旅の衣も春過て夏来にけりとぬきかふるんか
 〇 武蔵野の草の枕のいふせくていとねかぬらん君をしそ思ふ
 〇 梓弓春の衣をぬきもかへ才夏は来にけり旅の宿りに
 〇 秋の風とて足引の山をもみたす村雨のそら
 〇 虫 けふも又秋の風とて足引の山をもみたす村雨のそら
 〇 東照宮にまうて、
 〇 ほとをしれ上をみるなどいましめの言の葉残す神そたふとき
 〇 鳴海かた沖つしら波しつくてあゆちの里に春はきにけり
 〇 ゆめの世と何おもひけん千早振うつこの里に春去りにけり
 〇 秋の田の只かりそめの手枕にあたにはならぬ頼せしかな
 〇 春過て夏は来ぬら山里の垣根真白にはほふ卯の花
 〇 あし引の山田のそほつ守稻のかりにたにやは人をわする、
 〇 奥山に通ふ山人言伝む我鶯をまぢわひぬとよ

明和二年乙酉
 立 春 〇 鳴海かた沖つしら波しつくてあゆちの里に春はきにけり
 〇 ゆめの世と何おもひけん千早振うつこの里に春去りにけり
 〇 秋の田の只かりそめの手枕にあたにはならぬ頼せしかな
 〇 春過て夏は来ぬら山里の垣根真白にはほふ卯の花
 〇 あし引の山田のそほつ守稻のかりにたにやは人をわする、
 〇 奥山に通ふ山人言伝む我鶯をまぢわひぬとよ
 〇 富士の雪を
 〇 里子浦に釣するあまの事とはむ富士の深雪のきゆる日もある
 〇 鶯 〇 奥山に通ふ山人言伝む我鶯をまぢわひぬとよ

86 85 84 83

七 夕 ○ 鵲の橋のコトし守幾代かも織機つめをわたし来つらん
日 月 ○ 天の原イカサハわたる月日の影カゲならて水にもらさぬ恵イタミやはある
山 居 ○ わか庵は老を養ふ滝つせの枕まくらにひく多雲の野の原
速 懷 花の色は来る春ハルにホトこけれともうつろふ身こそ帰らざりけれ

93 92 91 90 89 88 87

同三年 丙戌
紅 葉 ○ これや此秋の梢の錦をば立田の山と名に上はふらし
旅 名 月 ○ 和多の原八重の汐路を漕こゆけはや、遠とほかる古郷の空
落葉浮水 つくはねの峯たかねは高くもみなの川なかれてちかくみる紅葉かな
晚 秋 ○ 道のくの岩手の山のいはねとも秋は紅葉の色に出にけり
旅 宿 立たわかれ旅いの宿りの草枕結むすぶ夢路も袖そ露つゆけき
祝 言 ○ 千早振る神かみのまもれは君か代は八百万代も限りあらしな

同四年 丁亥

恋

○ 住の江の山岸にありてふと心具ひろひつゝ行こひやわするやと

○ 難波かた芦火たく屋の五月雨で下にもえつゝ恋渡るかな

○ 吹からに木このもみち葉みたるめり風に色ある有明神奈備の森歌の空

恋

○ 今えと頼めし宵もまよ更て偽告るあかつきのかね

此秋攝州

にいたりける

をさしてゐるや難波の浦に舟すて、芦のかりねの旅そ他しき

難波方みつの浜へは朝夕の塩みぬ時の名にこそ有けれ

異年に増りて色の深きかな秋くは、れる木々の梢は

長月やおなし月日のめぐりきて又けふにほふきくのかならん

秋の夜や後の今宵を過て又後のこよひの月をみる哉

月かへて同じ名によふ長月のすてにくれしはからせりしを

とこの山名取の川の万代にたゆる事なそあふよしもかも

立てるて暮ゆく年を惜むかな我身ひとつの為ならなくに

千之に奉る

歳暮

同五年 戊子

立

春

○多芸の野に鶯がくも田跡川に春は来ぬらし鶯がくも

十月伯孔の東都に旅するを送る

○立わかれ旅行君うしとな思ひそね帰リえん程も久しけなくに

○立わかれ旅行に行君幸ましてはや帰リませ旅にゆくきみ

○今はた名のみ流れて旅人ととめもあへず閑の藤川

○よみてふ月はまきのつ夕にてけふの夕もなめあかしつ

九月十四夜

衣の浦のうた

千之曰 古今体 ○ 打よする波の初花はころひて衣の浦に春やたつらん

千之曰 拾遺 ○ 冬の夜は衣浦のそむけきに妻よひかはし千鳥なとなり

千之曰 拾遺 ○ わきも子が衣の浦の秋の色はみるめしけくもおもほゆるかな

千之曰 古今 ○ けるくと衣の浦にきてみれば日も夕暮春に成にける哉

千之曰 古今 ○ 春過てけふぬきかふる蟬の羽の衣の浦に夏はきぬらし

千之曰 全葉詞 ○ 浪とともに霞も春も立そめて衣の浦の風そのとけき

千之曰 新古今 ○ 昔おもふ秋の露にそやどりける衣のうらの秋のよのつき

草庵次 物名 海ノ字欣太平

○ きくも猶衣のうらの浦波のあけてのみこそ立かへりけれ
 ○ 夢にたにあはぬ物ゆゑいとせめて返す衣の浦みてそぬる
 ○ さめて今衣のうらにもとむれば浪のよるにそ玉はちりける
ハ何カクシカヤス
 朝ひらきこき出る舟をさそふころもの浦かなし秋の浜風
 今はしも暮行としかおもひやるすへたときも我はしらなくに
 おもともおもひもかねつあら玉の暮行年をとめんよしなみ
 池にすむをしけくもあらしあら玉の年はきのふとや我し老すは

同六年己丑

立 春。春はきぬ梅もつばみぬいかならん日の時にかも嘗鳥なかむ

旋 頭 冬去春はきにけり梅かえに花のも咲く春はきにけり

おもふ所ありて思ひつけ侍る

麻衣昨日の山路にみえつきにき陸奥の今日の細布春立にけり
ノ太平云々冬つらき冬ノ意ニヨリ
 わか恋は左山にたてるかるがやの人しれすとそ乱れそむらめ
めけれ
 かくはかり高きいやしきくるしきけはなへて恋する世にこそ有らし

待人のいかにこねはか三輪の山道もなきとて荒果にけん

芦原のしける中にすむ解虫の道は横にそ行へかりける

陸奥のいけてそしお世の中にいかに栄ゆる松しまの浦

里塚にこもりし思はみちのくの松島に今そうつるてふなる

堀兼の井を尋ねつたるとるまにやかてはてある武蔵野の原

よひ次の浜によせこむあら波のまなひからん音聞の山

わかのうちらあしへのたつもいつか又けいはかりとをなさんとすらん

ちりの世をばらひきよめん玉は、きせきとしも空にしる人のなき

細川の清きながれる有ものを濁れる水を何なげくらん

古一の聖ののりを身につみて民にをしふる然本の神

夏来ても音聞山は名のみしてまた音つれぬ山時鳥

谷風に氷もとけて立波の音聞山に春さりにけり

名所待郭公
名所春。
八月十五夜くもりければ

天つ風雲吹はらへ月みんと我のみあかすこよひならなくに

雨天なりければ。雲晴て雨のみもふるふれる習あらはぬれてもこよひ月をみましを

彗星

同折句

題しらす

旋頭

恋語

道論

老

冬

鳥名

同

祝言

物いけぬ色

うし答ふ

草「離」いづれか古夏ニテモルセリヤ胸の出へきせとしにや穢を拂ふ星のみゆらん

初秋や八月の空の霧務晴てほかにみゆる白雲の山

細川のすそきにあそぶ水鳥の清き流れをかつくへら也

河の洲に妻よひかはす水鳥も清きなかれを頼むへら也

雁金の雲井をわたる声聞ゆ也我為の秋かと思ふよはのむめは

久賢の空も日につきぬは玉のよるはも夜につき物おもふ我は

海山を越つて来ゆる友かきに相かたらふはたのしからすや

古の三代の聖の跡ならて治むる道の外にやはある

何をしてかつ老にけんまそかみ底なる影を恨むはかなき

海松のことそけきかりし我袖をいとはて宿る冬よの月

うかりけり枕かもみんたくひなく咲にほひ鶴きしのやまふき

磯せきに竹葉かり敷みつるかもあきしも月の時には有けり

治れる御代のためしか田跡川の老を養ふたきつ山石浪

物いけぬ色にも咲を花の名をなそも菊と人のよふらんといへる人

うし答ふ

述待述

懷恋懷

- 春きても冬の日数と鶯鳥のながぬ限はあらしふく也
- かにかくに乱れもそする片原のかる(かたき世にしすま)と
たのめつこぬよつもりてこよひ又我をあせむく軒の松風
、初句イカニアラムカ
- ゆくせこそおくかもしらに夜はあけ昼はくれつ、我老はけるのもかくも
くるとあくとなぐさむ(くもあらぬかな我にてしりぬ人の心も)

立同七年 春 庚寅

○ 是も又つもれば老となる物をおもはて春をめてにけるかも
春立ながら冬の日の残りけしは

山 歳 除夜雨 千之六十賀によみて奉る

菊 暮

- 言に出て秋をほらしと人皆のかつを菊の花にや有らん
- やまとなる耳梨山の名にも似す秋のきこてふ花咲にけり
- 老らくのいつちむかはかこせららん今年もけふにくれしはかなせ
- あすはしも去年の名残とみん物をこよひの雨に雪きゆるらん
- 手と折て君か千年をかそ(そめ十つ、六つとかつ得たるかも)

千之に奉る。あふみ沖つ白波立ておもひ居てもそ我は君をのみこそ
 天下皆春。雨雲のむかふすきはみ谷くこのそわたるきはそ春去にけり
 不逢恋。まよふけて空鳴ならぬ八声にも人目の関をゆかへさりける
 千之六十一に成玉ふに奉る

としの名をありのこし、かそへきて同じ昔に若かへる君

哥 偶字。磯崎や八十の湊は数ならず千の松原千とせへ君

張子房。土橋のたへぬ遠名はますらをを住こし里のかひにそ有ける

孟掌君。空鳴のハ声ばかりて越し君関のわたりのまたよふかきに

無 常。名草山何になくさむせく花もそむる紅葉ももろくちるまに

春松契千万。一に栄る春の松も猶君にきほひて千代そへぬへき

千之に奉る。我せこは千の松原がみ見つ、万代かけて名をとめけむ

しつて小里にからき、園のありけるを

○ せとの名のしつのをたまきくりかへしからは終に乱こそせめ

寄松祝 彦根中教吉田義昭の父五十賀

○ 君か代と共にさかへんをつくはのねらの松の木万代までに

植竹為友

いなほ山松のみどりの栄えつ、幾十か(り)か立歸り(り)舞
 春秋の葉色もわかす我門の千尋の影そたへぬ友なる
 窓ちかくうし植てし吳竹は我友としそ人のいふらん
 うつしうゝる軒の吳竹千代かけて我友としを契かへらん

四月初旬彦根にゆきて慈雲院の月次の会に物して

滴新樹

若葉もてわきの閣をかくとふは滴の方の夏木立也

夏まては日影ももらす中垣のせなたに立る木々の若葉に

垣卯花

賤が屋に、にのほさるかとおもふま垣は真白に咲る卯の花

と(か)しなせ尻たる宿も此頃は卯の花垣の花のそかりは

泊時鳥

難波かたみつの浦りの波枕なくそめかほに鳴く時鳥

舟はてし明石のせとに時鳥ねせめことふよはの一声

竹有徑色

いもしく深きみどりの吳竹や君が八千世の友にし有らし

ふしこと千代をこめつ、吳竹のみどりの色の替る世そなき、

吉田義昭のいせにまうてたまふをおくる

清き渚錦の浦をまくはしみ帰りはやくと君に告ぐ

江菖蒲

寢覚時鳥

山田時鳥

池辺藤

古寺藤

○ 君が行うまや伝ひの鈴鹿山手向よくせらありき其道
 ○ わたの底おきつ深江にきてみれば風に浪よるあやめ草かも
 時鳥か、れとせしむなかなくにかこちかほなるわかねせめ哉
 いちちか鳴て行らん足引の山田の小田のやまほと、きす
 池水の鏡にかけとうつしつ、みなきりたきつ花の藤浪
 ○ むらゝきの雲かこみみる藤の花法の庭にしさけりとおもは
 ○ 古寺に今盛なる藤浪のなみにおもはん花ならなくに
 吉田義昭の立別けふ古郷に帰る君又あふみちはいつの比そもといへるに
 きたふ ○ 一つはとは時こそわかねみの国関の藤川たゆるひあらめや

本書この所より田庵集
 安永五年丙申にうつる

田中の道万呂

紫川のうた

横雲の空より明てけしはしも紫川に春立にけり
 春されは急くの若葉のいろふかき紫川は名のみながれつ

232 231 230 229 228 227 226 225 224 223 222 221 220 219 218
 ほとぎす
 うつせみ
 かへし
 うめ
 かにはさくら
 すもの花
 からも花
 たちはな
 をかたまの木
 山かきの木
 あぶひがら
 くに
 せうひ
 をみなし

卯月立けさ朝しほと時すらもたかはてきなき島のに
 泉河清きはらつとひついでせきのいくひうつ瀬みえけり
 いづみ川その川の瀬をまきはしみるなきもうつせみぬ人の為
 にかき涙もうめさぐめやは世の人のうきたひ毎に身をしなけては
 山城のかくら岡にはさくらめと我はまたみぬ白ゆふの花
 恋せすも物は猶おもふかるかやのおのれ乱て世にしすまへは
 恋すれは天和もからも物はなぞ心にしみてかなしかるらん
 父母の飛かけりうはくむにいつしかひなのたちはならひぬ
 八をとめが袖ひるかへすかつら岡玉のきさはし神とひにけり
 鳴わたる雁の涙が朝夕におくやまかきの菊のしらつゆ
 こひてかるあぶひもある物を何かつらしと恨たりけん
 思ひあまり鳴なる秋やさあらんきくたにもうき竹鹿の声
 時鳥卯の花山の雨にけさうひくしくも音を忍びつ、
 よの中はしかつき物と我も人もこの年をみなしりつは
 風もかと夏は空をみ梢を見なへし草葉の影にくらしつ

247 わらひ
246 かはたけ
245 にかたけ
244 さかりこけ
243 かはなくさ
242 からほき
241 やまし
240 しのふくせ
239 めと
238 けにこし
237 をはな
236 りうたんの花
235 しをに
234 さちかうの花
233 同しく折句

雄神川水にもみちのなかる、を(たて)淀むる 柵もかな
 山さくらさける庵りの軒ちかう野はなそ風のふくもつれなき
 うらかれしをにひた山に秋たてはこらか心しいか、とそおもふ
ハコウタ虫喰クマニシテカクヘシス早
 君が代は(国)の(国)鳥とたん野はなしとれけや立もさわらす
 すみなれし里をはなれて武蔵野の田の面の雁も今帰るなり
 春も秋も朝も日にけに越路にはきゆるまもながく雪そつもれる
 春秋の時しもわかぬ花なれは風もよそめといとはせりけり
 こからしのふくせ(うき)を草枕旅路しくる、衣手のもり
 海山をち(に)隔てすむとてもあけてはやましひと(に)思(は)
 あふよほのひとりぬるごとなからほきぬくとそもなけかましやは
 時鳥またこれにはかなく里のありと告こし音つれもなき、
 相思けてかれにし中は遠さかりこけるからとそ身はふりにける
 難波江のうらにかたけるもしほ火の影もほのかにあけぬ此よは
 もろこしのよし野の山のおくにかはたける虎てふ神はすむらぬ
 秋の田の稻穂こきふるしづかほすわらひる(くそ)日はまらしける

262 261 260 259 258 257 256 255 254 253 252 251 250 249 248
 笠松ははせ まは
 なしなつめくるみ
 からこと
 いかーせき
 からせき
 かみや川
 よと川
 かた野 太平ヨシ
 かつらのみや
 はくわかう
 すみなかし
 おき、火
 ちまき
 けを初ると
 かけて、なめと
 かけて

鵜の橋にまつ日は天の川瀬をはわたらて君きまよなん
 あなし川夏めきながら岩間よりもりくる水の音そ涼しき
 君かせとに秋やきぬらしおのつから言の葉さへにうつろひぬめり
 あさかほも露路にはいかーせきたむきえてそ花はしほむらなる
 これやこの末つむ花の名なりけんまつほすゑから咲初にけり
 花をみつゆく旅ながらせきののちりなんころは猶やうからん
 年をとてもたる鏡やかわれると思ふ追にも老にける哉
 あれはてわれのみすめる谷の庵にひとりみよとか花の咲らん
 いまんとちきりしこの偽りをわれはいくよかたのみきつらん
 ちはゆるかものみあれのゆふかつらかつらのみやはかけてねきつる
 山路ゆきわらのくつはくわかうまのまなくつまつく家恋らしも
 かくれすみながしる宿と思わねをよほの水鶏のたくななるかな
 よるはおき昼はきえつ白露は物おもふわかたくひなるらし
 かゝる雁姿を人にみえしとやかすめる空に立まきれゆく
 花鳥のねにこそなめをしと思ふ盛を風の吹ちらしぬる

273 272 271 270 269 268 267

あ 春十首
い
う
ゑ コノニ首
わろうふ
とこ入シ
か
き

266 265 264 263

ひくらし
くれのおも
おきつる都島
漆殿 あはた
コノニ首ニテハロシ
けつるへし 大平

附

月きよみよひ人もやとひくらし告もやりてんこてふはかりに
妹にこひ衣手ひちぬ神無月まなき時雨のおもほゆらくも
沖の居る水鳥よりも陸のみやこしまなこの地のわれそくるしき
いそめと後とはあれと阿波と安房多くひは同じ国はことかた

已上

阿はたこしくそといふて
古今撰の説アリ 大平

おなしもしあるうた五十首

あら玉の春とあけゆくあしたよりのとけくも有かあめのかく山
春の色のいたりにけりな泉川岩間の氷今けとけつのこりてイッレ
ニテモシ
うれしくも春日うらに梅咲けは打はぶきつ、鶯なまきつ
ゑかいはや何とゑはみに植置し花の梢のうくひすのこゑ
風をたにいとしし物を賤の男か成盛の花を手折タヤリてそゆく
朝日かけのとみにみえて春日なる三笠の山に霞あはけり
きつみよこのかはきしにきのふけふ咲て白川岸へる山吹の花

288 287 286 285 284 283 282 281 280 279 278 277 276 275 274
になとてつちたそせすしせこけく

秋十首

夏五首

北へ行く雁そなくなるかくてしも秋くるのみやちかひけらくも
池にすむをしけき春もけふとてや霞をわけて立歸りけん
こむ年もあれとこしの此春はこよひはかりとのこるはかなせ、
あさ衣けさぬきがへてさしもなと去りにし春のせらに恋しき、
今しはし青かく山に白妙の賤が衣しほしつらんかも
鶯のかりす巢立し時鳥五月の山にたへすしはなく
のとせ川瀬々のいせきの水の音に梢の蟬のきほひつゝなく
けふこそと袖ふりはへてみそきするそがの川原に夏そ暮る
田跡川の滝たにみへす秋と共に霧立のほるたきの野の原
ちくに待しこよひ夜霧の立みちてかたちかくさふ星合の空
上代も思そいつる玉水のたきつ宮の秋のよのつき、
見てもこよひそてのみひもてなくさまぬ姨捨山にてれる月影
とこの山麓の里の秋の葉の色つく時もわれひとりぬる
奈良山の嶺に鳴なる鹿の音にながはたけゆく秋そかなしき
新田山秋の紅葉のからにしきいほへ色ます朝に日にけに

ぬねのひはひふへまむむめもやみ

冬
五首

恋十首

秋の葉のおらぬ錦にたちぬけぬ衣さらしぬ布引の滝
 かねの峯に暮行秋とめかねかねてねとのみ鹿の鳴らん
 おのつから秋の形見におく物か我衣手の露路のしらたま
 冬きてはまなく時雨で柞葉の落葉ひたせりまなく時雨で
 大いえやとひえひらのねあらそひて日毎に雪の積りけるかも
 不破の山麓流る藤川の淵には雪のふれとたまらす
 とひく(きん)人とせこみゆき(てたてつ)ひな(の)家居いたくさふしも
 程ほろくとかすめる月にもなく年波よりて大原や朧の音水ほかならすみゆ
 きこまにおのか真袖としほるまでまたみぬ人にひわたる哉
 あふみの海がからのみねの山桜霞のまよりみてし人はも
 むとし野の頼の里の頼むかな結ふちきりのむなしからしと
 夢うつつたためかねてそまどふめるみるめの浦のみるめなきみよ
 から衣日も夕なれば片もひに思ひみたると妹しるらめや
 するやいかたにえつ君を思ひやる山のハツ尾も八重の塩路も
 雲居には雲を霞ぬ居る雲の立ても居ても物とこそおもへ

蛭 附 お え う ろ わ ろ れ ろ り ら よ え ゆ

蛭
と

太平云
田舎の家トモ
ろ中家だつ
サトツケイハ
レバ也
コノ二首
あいうえおに
入ヘシ

雑十首

歌無し

関こえんえにしえまもおもほえす雪にとたえし逢坂の山

月よよし夜よしとよひわくらはにこしとよふかく鳥の鳴くらん

老らくのこぬ里ならば鯨よるあらし浦わもいとほさらまし

花はちり葉はもみちぬまかりけり盛りありとまたのまれぬよに

よる昼よわかす流る川水はたえぬ教の道にや有らん

のかれつかくれの山に我をれはあはれといひて誰かとひえん

白妙の我衣手に移ふや花ももみちもいろふかきころ

吾妹子にわかれて我はわきみ野の草の枕の旅そわひしき

沖の井の田舎家居の筒井には又しも終に氷るさらむ

うつせみのうけきうき世も愁(てもそを)しもたれか恨はてたる

難波江をこえつる住の江の松は幾千代よに聞(けん)

大君のおほみめくみに大やまとおのつからこそおたしくはあれ

磯崎にちれる言の葉聞をも君しとりては我うれしけん

あらかねの土の下にもよやうけき骨なきみすねのみ鳴也

くつ ほうしと

古今物名
五十音をこ

琉球の萱ユナ

麦ト

あまかへるト

蝉ト

秋されはなれしも物の悲しきくつくほうしうしと鳴らん

ちよかてふ名にしよはれてそは豆の花咲みなる秋の此頃

葉の色は浅むらそきに実の色はこ紫してなる茄子かな

うるまよりあみて渡せる思直もわかあふみには猶しらすけり

月にまき雪にはえ出て花に栄へ夏はみのれる麦にも有かな

雨雲の棚引けらしそよ更てこのもかのもになくあまかへる

そよしも風はそよかぬ夏木立梢をゆるる蝉の声かな

能登・大和・若狭 曹豆・安芸・紀 但島・甲斐 志麻子 佐渡

国名十

潤六月旋頭歌

寄 曉 恋 ○

寄 夜 恋 ○

寄 夢 恋

寄 湖 恋

寄 鳥 恋 ○

野と山とわかさることよ秋霧の立まかひてします國の里

望の日の其夜ぶるて富士の雪はも六月の加はれるにもしかならめるも

時守が打なす数のむつともまたつきなぐにあけぬ此夜は

あけぬとやみれと夜ふかき秋のよの長きよな夜古風ニキマキ独かもねん

妹か手を枕にまきし悪も今覚て現の鳥そなくなる

うらみてもなきてもみるめなき海を誰かあふみと名付そめけん

鳥てふおほそそ鳥のながぬ日はあらめと子守を恋ぬ日そなき

寄 鳶 恋 ○ 久かたの雲をけるけく飛とひの高き人にも恋わたる哉

寄 雀 恋 ○ かりてはす稻穂にすたく村雀飛立はかり人そ恋しき

初 秋 ○ 一葉落てよは皆自秋といふぬれと霧立そむるけふの夕暮

名 所 月 ○ 秋のこよひこよひのみや告てましきやかにてらす月昔の里

陸奥の沖るの里は月清みいねかてにする名にこそ有けれ

八月十五夜 ○ 鳴海かた塩干にけらし中空に秋の最中の月のみちにき

旋 頭 歌 ○ なるみかた秋の最中の塩ひつらんス方月の光は空にみちまき

林松寺にて ○ 常盤なる松の林のかひよりもこよひの月ツツはなめあかしつ

野 秋 風 ○ 古寺の松の林にてる月は幾千代かけてせやけかるらん

秋風の吹つるなへにむさしの草は比白から乱そめてき

田 秋 風 ○ あゆかた打出てみれば稲田のほたの稲葉をわたる秋風

七 夕 ○ 天の川年にわたりてぬけ玉の夜やもふくゆく紐とけわきも

夷 曲 ○ 春きても花もさかす夏きても時鳥ノコトなかつ天の川

一 首 ○ 秋しきぬれはわか心やすの川そいわたりきませ彦彦星

天の川みてをわたらん秋ならてしのひわたるへき浅せ有やと

日てりをなけく長うた

やすみし、
 千早ふる
 よのひとの
 いにし(も
 手をとをりて
 山すけの
 小秋七き、
 月か(て
 十か(りに
 わくらわに
 あらかねの
 百川の
 うるし田も
 花さかす

我大君の きこしをす 大和の国は
 神せはしすくれ竹の よに伝へて
 いひ次くらく 久かたの 雨よけひせし
 かる(しやは 雨ふらぬ 月日の数を
 かきかそふれば ほと、きす きなく五月ゆ
 六月過て くは、れる 六月もすき、
 秋風そよく 初秋の 七月の末と
 月にはよ(き、 久方の 日には十日を
 あまる日数を 大空の くもりしもせす
 くもるとすれと 天つかせ 雲吹はらひて
 土さ(せて あさ夕の 露たにおかす
 水もたえつ、 せきいれん よしのかけれは
 はす魚園 かれしと思フ 島さ(わら、秋と思フ 園しほみ
 ほにしもてす おとつひは あけたひたかれ

大平の洞虫トス(シ
 □□

一首 用濁字

一首 用清字

物名 ひしき

五月雨

九月十三夜

田跡川のうた十首の中に

キのふけも くらたかれゆき、 けふけしも せむす(なみに
 河に出て 空打守り 天の川 其川の瀬を
 せきかけて よそなしつ、 久かたの 雨たまはねと
 こころには ち(にいのれと 玉ちけふ 神も受すそ
 成にけらしも

返すく程そ久しきかくしつ、すくしせし月と(たてし日数は

あまなるやあまのまなるにいのりがん天より雨のもらぬものゆゑ

花ちると春はいとひし木も草も風待かほの夏の此頃

ひさかたの日の目もみせす雲とちて空をみたる、月にそ有ける

長月の名たる月の影きまみ更行からに、よひわひしも

長月の十日あまりの三日のよは望(モク)にまさりて月そそやけき、

- 老人を養ふ御代の春にあひて名におふ滝の音そそやけき
- 夏きまはまつ結ふ手の雫にもにこらて清き田跡の川水
- 多雲の原の秋の錦とぬけんとや霧立秋の滝の白糸

祝言 夷曲

361 軒之先生に奉る

○ 妹らかりいたとり行つ田跡川のたきつ早瀬の我こころから
 ○ なとあれと契りし事を田跡川の滝つ瀬のこゝたとゆと思ふな
 ○ 春されは滝つ山川に住魚のわかゆてふ名そ田跡の川水
 かりはらふ跡より草のけ尤次てとはに八坂に栄えます君
 妹の山や世の山ヤモシワラシキヤの(に)春されは鶯なき桜花咲せむ
 をちちの峯ふたわたりのとけく春霞たつ

362 題不知

○ こゝさくから国ふるこゝのふみ式島の大和国のふるこゝの葉も
 まくはしみしてふた国にふたわたらす大管の種種の君種の君種や
 日の本の西の君をさめ給へるつくしのひの国
 ひの国に土こえさかえ花咲みなりしける
 つくしのひの国

初冬 十月三日 音誉一周忌に

神無月まきの板屋にひとりねて寝覚さひしき雨の音哉

初冬 菊

○ 去年のけふ雲陰てしみかの月めぐりきにつ袖にやとれる
 ○ 暮ていにし秋のかたみと見る菊の花さへにや移ひにけり

初冬月 ○
 寄松述懐 ○
 題しらす ○
 用清字歌 ○
 題しらす ○
 古井の里にて ○
 御器所の里を ○
 郡の歌 ○
 歳暮 ○
 あの声なき歌 ○
 沓庚寅 ○
 序歌 ○

神無月時雨のみかはてる月も晴み曇み定めなき哉
 春の雨秋の時雨と年とてみの、お山の松もふりにき、
 家きかば告ねととはは春の野にいせと答へてわかたつむす
 もる山のやまのわら屋のやねをあらみ雨やあられのもりにまりぬる
 美の、国もやまの峰に雪消てあるみの川に水かさ増れり
 箸雁鳥のいつとあゆりてあゆりかたころてふ里の名はとめけん
 君か代はがうこきそとせしならんこきその里に秋田かるなり
 今ほと渚の氷もとけ初て春立にけり浜松の里
 いまさらにうきす作らむ水にすむ鴨の本巢の氷るにけり
 老人を養ふ滝の氷てや田跡の川音きこえさるらん
 春はまぢ暮るは惜しむ二道は年ぞ思はん事そやましき
 年のはにかくある物と今年のみくれぬるかとおもほゆるくも
 一年のけふに暮れる時こそは月日(に)けることもしらるれ
 老の坂いや高山の峰とこえこしもけふと暮て行團ら
 よるひろをわけて流る、水鳥の惜くも年の暮果めり

除 夜

ま(かき)なき(き)歌

○ 年と惜むこよひよと庭鳥の二年かけて鳴渡るらん
 鳥のねも曉ちかくきこゆなりせかひやいつら去年とことしと
 夜もすからいとねす年を惜むまに更行鐘の曉の声

筈なみの あぶみの海に ふねはしも 沢に有とふ
 白浪は ち(に)よるとふ そのふねの 数なきかこと
 そのなみの きよしかことく 諸ひとの つとひたまひて
 敷嶋の やまとの国の 春草の 言の葉しけみ
 宮人なす みやひとしつ、 玉のとの なかくちきりて
 よろつ代に たゆることなく まとろしてなむ

前書なき(き)歌

ここに貼紙ありしと
 除夜より明和八年
 辛卯年ぬ正月春ニ
 ウラシ

久かたのあまの山とを出しよりひかりたへせぬ白王大神
 みねにのみ煙たまたつ信濃なる浅間の山のあまの世や
 二月や咲みたれたるも一日さ(つりに)なく鳥も鳥
 境山霞かゝれる春しもそ桂鹿の里に匂ふ梅かな

明和八年
年ぬ立春
立 春

辛卯

あつさ弓春のこなたに立春はまた鶯のこゑも聞えず
 天のはら ふりさけみれば ほろりと や、明わたる
 しのめの 横雲ろつ、 久方の 日影も白ひ
 鳥かなく 東のかたゆ あつさゆみ 春立初て
 あま雲のむかふすきはみ 谷く、の さわたるさけみ
 おしな(マ) 高きいやき、 よのひとも われにてしかぬ
 ますかみ、 そこなかどなく、 のとけく有らし

重複記録

379 水香庚寅 老の坂…より

390 立春 五行 われにてしかぬまで

- 一年と身につみつも春されはワ若か長ゆるえしかこと思ほゆるかも
- かと松も今一しほの色そひてみの、を松お山に春去に鳥兒
- 時しらぬ山といへと春くれけ富士の高根に霞柵引
- いせや川いさともいはし春きては氷もけふそとけ初にけり

434 433 432 431 430 429 428 427 426 425 424 423 422 421

松 母に同じ人の身まかり給ひけるに
其人八十歳也 五月二日の日 なりけれは
おなし時に 物名かきうはた。○
同 なでし、
詩 経
春 雨
朝 鶯
無 常
年 立 春
春 蛙

木のもとにおち葉絶せぬ松の木もかはらぬ色そよはなりける
木下もと可なりん
大子ムコノ四首アコリヨシクモアアネに題作ナラヌハ哉戦(シ)
うかりけるこゝを昔のよせにみて花の臺にのほり行きつ、
千代まかと祈し物を百たらぬ八十や神のへなるらん
おとひは年暮春きのふ立春にけふしも人とわかる(しやは
生けしと人はいへとも此春は人と別れていけりともなし
ちきりてし百夜をもちに数かきうはたや今宵も独ねよとか
まきけはこひこそまされ我宿を思ひすてなでしこ時鳥
鼠すらよそひはあるを玉ほこの道なきひとははやくもしねや
かくしのみ草木はわかんとくもりけふ春雨のふらくしよしも
ふるからに野(の草木のはるなれはうへも名におふ春雨のせら
おとろふは遠そきなんど朝戸あけすねやなから聞く鶯の声
まぬかれし例とてしもあらなくに人をおとろく我や何なる
ふゆながら春かたまけて立春はのとけき空の初めなるらん
春は今三月半のくれに蛙妻よふ声そよひしき、

青葉○ しけりてもまた木の本もくらからぬ春の青葉はみれとあかぬ鴨

桔梗○ かまと山麓の野への秋風に蟻のひふきの花及此にほへるそ乱る、

郭公○ ひとりぬる其つまこゝに短夜をなかしとや鳴く山ほととぎす

郭公末遍○ 人伝に聞つる物をほととぎすなど我宿に來鳴さるらん

彦根に遊しとぎ 及此云何ノ一ニヤ

物名すゝろと あふみとは心すゝろに藤川の川瀬をはけふ渡りてそこし

同時はせとま あすよりは秋としきけと夕まくれまたみながつきぬ六月の空

同時一夜 すけよし致 まそかきそかの川原の川風ははらへのみちそ夏には有けれ

同じとも、慈雲院にて五月十日会

対泉忘暑 暑けさのみさきもやすると立よればうしも夏を忘井の水

夏月 難波かたあしのかりねの短よは月も天路をいそぎもそする

寄扇恋 いかにせん君に扇と頼みしも秋せりくれやけなち捨つる

夕望旅客○ 鏡山影もと、めす夕暮に旅行人の道いそくらん

川眺望 行水のみとり色そひて涼きは「たあふみのあと川柳」

460 459 458 457 456 455 454 453 452 451 450 449 448

垣夕顔露

七月留初秋

同じき七夕

同じとき
寄灯恋

柏渚琴松

しつやしつ賤か垣わの夕顔にほのく 結ふ露路の白玉

秋々ぬと今朝いちしろくしられつ、我衣そ露路けかりける

一年はなかれて早き天川も暮待ほどの遠くや有らん

またしとは思ひすてなてこぬよしもいよくかけしわやの灯

菊の露路てふ酒をおくりたまへる時によみて遣しける

けふをしも其初とて白菊の露路と共にそ千代は(ぬ)き

千代かけて君かかきなす玉琴今に秋の松風しう(そめ)けん

鶯のかひこの中に春立て夏きにけるとなくほどきす

秋の野に捨てやいにし父恋し母恋してふきりくす哉

時鳥

きりくす

物名

つけくらめ

かりかね

はしとみ

たてしとみ

こしは垣

いん年も夏はくらめと時鳥秋ちのつけは鳴音絶ゆる

秋はきて春は別るほどたまを思ふけかりかねのみ鳴らん

今しはし富の小川にあやめ草みどりも深く宗えあふらし

つこの国名にはたてしとみつの浦のみつとも人に我はかたらん

一よのみこしはかきりのあふせとや年へてまてとおとつれもなき

らふそく

しきかは たみ

雁鹿紅葉

ちやつぎほに

ひたれはかま

夏歌

老

野秋風

旅秋

夕納涼

五月の中

わしみの

ち(に)立波

君かかへ

とよみて給ひけるにかへし

高山の下に流る、涙川袖を洗ふそくるしかりける

珍らしき川添柳春はた、水の緑も色ふかきかな

さかりとや人もみろうしかくしのみ影もみちてし秋の夜の月

木枯にもみちやつきんかくしのみは入に染し秋の梢園

うきひとにあらひたれといのらはかまさしきしろしあらんとすらん

夕ぐれのかやりのけふり立さらて窓よりしらむ夏の明ほの

老ぬれはかすむ雲間に影そひて二つにみゆるよはの月かけ

秋風のかく野(毎)に来てみれば葛の葉のみも恨さかりけり

鈴鹿山す、吹風の涼しくてすろに道のす、む旅かた

衣の紐夕立くれはしぬのめに風打ふれて袂す、しも

五月の中、ろ彦根に旅居して立帰る時林義房の道丸

わしみの、国に帰たまふによみておくりけるとて 近海チノウミの海

ち(に)立波、その浪は君をととむる袖としりませ別小行

君かかへさにあはまきてみの、国わさきにせねあはまゝを

と、むちふ袖と聞つゝも浦浪の立帰る身はいけりともなし

重複記録

始めのところに船紙あり 根 根 根 根 ……より 475 …… わか思ふ君の部分に

あふみの海みのいふ山とへなりつるとも思ひ出しておやじ

心に月はみてなん

大平云 点清 / 及岳ヨロシ

この下部分は読み取り難し 重複の後のところで読取る

及岳ニ首尾不出来也

根 及

ねにくきにあひさかゆ(み粟まくと君か言の葉いつか忘れん

述 懐

近江てふち(の浪路を立別れつゝ尾張なるあはての海に帰るわしも

義房によみてつかはしける

みま之ほりもゆるる思ひに今こんとなもせしも草きしも隔しいふき山かも

同 古体

いにし(中人の言くることの葉を今の現にうたひのへ

習ひうつして世のみやひふたわたらす林の義房

わか思ふ君

くれはまた名たる月をうつしみんと向ふ泉の兼て天陰 園

しらすきのうつろふからに山の井の底にも秋は残りすくなし

声きはひとり / かことなれは同じ哀をなく野への虫

大平云 此入くハヒカコトナレ此時代ハイカラコトハノトリ 今のハノトリ也

秋半向泉 秋深向泉 野 虫

物名

- 492 松 たけ
- 491
- 490 ねりかき。
- 489 はしほみ。
- 488 きちかう。
- 487 かるかや。
- 486 あせかほ。
- 485 しもつけ。
- 484 せくなむせ。
- 483 かいつはた。
- 482 かにひの花。
- 481 さるとりの花。
- 480 いはやなき。
- 479 七くら
- おのつから春を名のりて朝倉や木の丸殿に花咲にけり
- あら磯の塩のみちひに見えかくる岩や渚にぬれもかわきも
- 水にあさる鳥のはなれてむれたつは心ありとや我をみつらん
- いかに火のはなれて沖にみえつらん筑紫の国の昔晩が、リッパかたりは
- あふみなる海川は誰かきてもみんけさ吹風に花はちりにき
- 花咲し梢をせくなむせこひよちりなん後に枝はをとるとも
- あしのやのなたのあまらは玉くしもつけの小櫛もとらぬとそいふ
- はたすきおの時とて秋風の吹つる朝かほにしは出らん
- いく秋かひかりくももわすれすいかるかや富の宿ろらん小川に月初句トサシアヒや宿れる
- こはにきてそもいせちかきちか浦の名をとへはちひろとあまは答ふる
- 東路にゆきとゆきかふ旅人のたれかやはきの橋はみても見んに海人もあはなんみたらん
- おもふと硯にむかひ筆筆ひねり書て送るを人みけんかもいかにみん
- 沖中のと浪のうねりかきわけていせとの延雲そいとなかりける
- もやくと松たけ過キコエカクしなきひとを眺かけてわすれかわつむ

後に重複記録あり

507 506 505 504 503 502 501 500 499 498 497 496 495 494 493

く、たち ○ ほときす梢たちく、橋をおのか宿とやなくえたねせぬ

こにやく ○ 立田川もみち葉なかる秋も今水の底にや暮ていぬらん

くるすの ○ かくるすの糸を軒端にひきはゆる蚊の行ひ誰くへきとか

をかほの橋 ○ けはしも若なつまむを何をかは野はしら雪のふりつもるらん

日くらし ○ 姨捨の山の峯にもひくらし衣うつなまり及岳アキシノノ里カの女と

をけり米 ○ あら小田のあら田の時とあみをはりこめやとまつにさわくあちむら大早み中トスヘシさらしなの里ナルヘラ

里うたん ○ 賤か屋の軒にほしたるときき衣はいつの宵よりうたんとぞ思ふ

なかむしろ ○ ほときす今しきながん白妙の卯の花咲る宿のまかきに

きさの木箱 ○ 冬かれの梢あらはにふりゆけはむれしあきさの木のはこふらし

むなぐるま ○ なぐるまは我もなけてむなぐるまのはやくも人を思ひそめてき

あしかなへ ○ 雪のこと風の訪ひてふりくめりいつくのあしかなへて散るらん

むろの木 ○ 君か代の八千よぬき例かも夏もひむろのきえぬ氷は

つこのみたけ ○ くら(て)しその井筒のみたけ過すいもせは深く初大りけらしも

ひほしのあゆ ○ 天の川もみちの橋はこよひのみいぬかひほしのあゆみゆらん

さしのをとり ○ 妻別みになんしほろとなきし野をとり求めてはありかしらるれん

一本サ菊。つみやき。うるかいり。はらか。そやまめ。やまからめ。さけやけ。つくみ。まかり。初秋風。露。月。八月十五夜。秋半過。終夜見月。

秋の吹^立せぬつれは浦人も時くといまやすきつるらん
 神垣に近き家居は常^にしもきわかつみやきこえきなまし
 秋^さける花を春より誰^もしかも野へにうつるかいりてみてはん
 冬^なから春しきぬれは天の原かねて日影そのとけかりける
 けたしくも都の人かねれそやしまめつらしそきて過るは
 ことしあらはか大年^な道は遠くもかちよりやまからめとこそ思ひをりしか
 玉ゆらにきのふの夕へ時雨てし野への草葉やけもみつらん
 おちたきつ田跡の川水先波て待えし春にわかえつみん
 立田山雁飛こゆるけふよりやなへて木草の秋をさるらし
 いつのまに立かはりてか唐衣袂に通ふ秋のはつ風
 いせ^こめに廿秋の下葉を染初て草木のこさぬ秋の白露
 なへ八重空に立まふ村雲の月^たえまをとめてわたる月かけ
 老らくはまぬかれすとも秋のよの今宵の月をめてせらめやは
 秋は今半過れば月もや物うかりけにいせよひぬぬり
 出しよりあがすそみつるむさしの月にはてある曙の空

526 525 524 523 522 521 520 527 528 529 526 525 524 523

虫
○ とう(なく)鳴音をとめて立よればや、遠そき、ぬ野への松虫

八月四日の
○ 長^{兼か}羊のあつまに下り給ふを送りて

○ 越^{ゆかん}け行竹相根の岬千よりねもころにぬぐ手向てよからき、其道

○ みよし野、里の宿りに秋ふけはかへら^{古風になき事也}てありと雁に告げそ

○ 武蔵野と出る日と日を我はみん鳴海の月と月はみよ君

○ くまもなく月のみてれり長月のこよひは星のうつらいにけん

○ 天つ雁まで言伝んむら雲は月のあたりをよきてよとこそ

○ 風もなく月もくまなし鳴海かた波もよるとはみえすそ有ける

○ みよしの、山の名はしもあらためは花とやいはん桜とやいはん

○ 塩やかぬ海とはきけといとまなみ延虫のしほ、やから崎の浦

○ なれしもや春はうれしき梅がえにきなまきととり鶯鳴も

○ 夏過^てにあくるあしたにこし秋もあすをし冬と暮はてぬめる

○ あまる追露はおかれと鳴虫の頼むにかたく秋暮春にけり

○ 千年とは一木の松に契り^{あて}すて、志賀のからき、秋暮にけり

○ 竿鹿のくれゆく秋をと、みかね何をかひよと鳴^{た、鳴くらん}わたるらし

暮 秋 鹿

湖 边 暮 秋

暮 秋 虫

暮 秋

早 春 鶯

湖 边 海 人

吉 野 山 春

海 边 月 明

月 中 雁

九 月 十 三 夜

538 537

秋あき
すめになたふ

○ 夏過て冬はまた、ぬ此頃を秋といひてまうらかなしも
○ 秋風の立せむるより玉の緒の長月かけて物そかなしき

明和八年辛卯秋九月

垣ねの落葉

明和八年辛卯冬十月

濃人衢磨

538 539 540 541 542 543 544 545

初冬はつふゆ菊

○ (ことうすく) 秋におくれて咲きこのうつろへるをや盛てふらん

初冬はつふゆ鹿

○ 冬きては時雨にひつち竿鹿のわひなきするもまれにこそきけ

初冬はつふゆ風

○ 秋もしかありつる物とふゆのきて又おとろかす木枯のおと

初冬はつふゆ雲

○ いくはくもふらぬ時雨に神無月雲はこたく立さわくみゆ

恋こひ
おもにいたふ

○ 何とかも恋のなぐさとみわたせはみる物皆に思ひそまえる

寄物よしみもの冬ふゆ思おも

○ わかせは千世にもかまなから崎の葉かへぬ松のさかゆくかこと

初冬はつふゆ月つき

○ あふみなるちの松原ちよもかと思ふは君をみまほりこそ

時雨ゆ糸月の姿はかくるふ園久かたの雲園の影そそやけき

よとかは

○ ほと、きす待あかしもてしことも程なきにはや秋のよとかはりゆる哉

やま

○ 五月やみ川つ、まよふ諸声はなれもあふよやまとは成らん

まつむし

○ 君かへん千世の春にはしかしとそまつ席むし田にたつや鳴らん

も

○ 足引の山も紅葉てま遠つひと雁とひこゆる秋の夕ゆふくれ

とち
たち

○ 大和路の大宮にあれにけり國遠そきて立はなるれば

すばうこけ

風や

はきの花

きそひさく千種の花にせはき野はなつかしくのみおもほゆるくも

した、み

大君のをさめ給へる天の下民はまこしをわすれてそすむ

あらがねの
みやしろ

雪ふれはせりの葉末も埋れてあらがねのみや白からんかは

いぬかひのみゆ

今しはし潮も沖に引ていぬかひのみゆるはふき、あけの浜

さはこのみゆ

秋きゆる木この梢にはやけまはこのみゆるかむ百千鳥かな

かのえせくる

つまこひにわれもねとなく竹鹿のえさるや同じ思ひなるらん

けながむし

年とへてひとりゆるみはながむしる今はをしのみしきしのひつ、

けにこし

今はとて事はつきわとわかれつ、朝けにこしを人みけんかも

ら

うき物と身にもしるかな妹とあれと別る、空に有明の月

虫 喰

586

かきののから ○ 今ほとと出くる谷の鶯は近き野からや鳴はしむらん

587

ふりつ、み ○ 春の日にしつ心なくちる花の雪はふりつ、みよしの、里

588

まきのやたて ○ 秋風に草葉も露もいふきまき野やたてぬきの錦みたれん

589

からかみのかたき ○ ありきく此山（からかみのかた山岸打さらす布引の滝

590

とりはくき ○ たひらけき世にも忘れす白かわのめぬきのをたちとりははきてん

591

水ののみ ○ 霞こよたな引にけれ山城のみつのみまきに春たつらしも

592

かさ木のいは ○ 行暮て宇治に宿れる枕には小嶋か崎の岩やまかまし

593

待 春 ○ 老らくを身につむ事もうつて、そ年立帰る春まつ我は

594

除 夜 ○ 暮はてしこよひ一夜に庭鳥のかけろと鳴ぬこそことしをこ

明和九年 壬辰 即安永元年

都鄙立春 ○ あまのかる夷にはあれと打かす都もおなし春立にけり

天下皆春 ○ 久方の月日のわたる天地のそくへのきはみ春立らしも

春来梅未覚 ○ 何（左取にあらず）も鶯（ささふしる）とて風のたよりにたく（やらまし

鶯未聞 ○ 打なひきのとけき春は立物をなと鶯のきながさるらん

612 611 610 609 608 607 606 605 604

早新 旧近遠 浅深 高低

603 602 601 600 599

うころもち 玉つほき うちほかま 物名なしたの 春興

十首

- 花はなもおとし春やとき、春をとしと云う定り 鶯うぐいすもまた音ねつれす春をとしとは定まへてまし
- 同じくはわかしめし野のに若菜わかしめつめ日にけになれかこにくるみん
- もみち葉はをなかせしとにや飛鳥と川がはうつまく涙なみだはかまへさるらん
- 世よの人の例たとひにひけることほきの声こゑをやあまた松まつは聞きらん
- 秋あきちかう比ひも近ちかづく衣手えでの森もりの木陰きかげんぞ涼すずしかりける
- かりそけてみつゝあふけは久ひさかたの天あまつ雲くもるそいよ、けるけい
- 夕月ゆふづきは山やまにかくりぬ今いまはとて我われもはひいる草くさの庵いほりに
- 朝和あさわに水門みづかど出でまくとかきたくるいかりの網あみのいく千尋ちぢんそも
- うさしつみかつかんほとの水みづもなし春はるの山田やまのたににあさるあちむら
- みちのくの秋あきのみみちをみまほり都みやこの春はるとけふ旅たびたちらぬ
- 里さとの名なとね物語ものがたりとうもいへりあふみと美濃みのは山やまもたてす
- 昔むかしたにあるあるてふしかの都みやこは今はさながら秋あきの野のらなり
- あから引日ひきひ影かげもまたすあさなまな咲さこそけはれ朝顔あさがおの花
- 風かぜもよし塩しほもかなひぬわたつみの沖おきゆく船ふねはまほにのみこそ

遅

義兄兼題三

○ うはにうちし車をおもみおのか名のうしとしものみ歎こそ引がやみつれ

○ みぬむかしみさらん末のよしかけてかはらぬ空そ空にしらる、

○ 月かけも日影もことにとけきや天つ雲井ゆ春立らしも

曙

○ はしきやし霞段のひまゆかきろひて日影にほへる春の明ほの

○ 有明の朧の月の影きて霞のまより白ふ横雲

○ 咲をまち散をしむと梓ろ春は心のいとまたにあらす

○ 春風もあらくし吹ぬみ代にあひて心のまに花そ白へる

千之先生の古ゆふるは稀ちふ七十も今七年に成にたるかもの給へるに答ふ

あふみなるちの松原つはらかに君か齡を聞にたるかも

去年の九月彦根のよしえの主ゆ玉つてしていへらく

尾張の鳴海の里に大舟のゆくらち小人あがりと海龍大とこ

ののらへ給ひつ汝がすむなるみぬの国ゆは道も遠くしも

あらさらんととりつ古言ふりの歌をよみかはしてよとなまも

いひおこせたりける定まめなき時雨の雨にさへられ寒まう

なる雪天陰霜霜務にをかされていつしか年もくれてき、あら玉の

621 春やりくれと木のふといひけふと春もくれて卯月たつ日に

なん思ひ立て道の行てのあはての森と越て

こえゆかく道にしもへはけふまでもあはての森はあれそへたてし

622 熱田にて 是やこの天つ神代にまつるはぬ玉むけまし、神の神垣

623 有松にて 里の名を思ひ頼て来し物と名のみなりけり有まつの里

とけはとまにて今川義元ぬしの墓に

君がこと名たにのこらは國がくん住けてぬへき世にしあらなくに

624 鳴海にてゆくらへよみてつかはす

我がうらてひとの国にも音高く鳴海をみにこし我そ

卯月立鳴海の里の時鳥尋こしあれに初音きかせよ

625 鳴海の野へにいほりし宿りぬ呼子鳥の鳴けれは

うらわがみ草の枕の独わに心ほそくも呼子鳥かな

626 鳴海の橋の実丸ぬし此朝け初めてみらく時鳥さわたる声は

627 けるけくきけとといへるにこたへて

628 時鳥またしき程のしのひ音を君か聞けんことそやこしけ

大守云々云々云々ト受テリ

ゆくらの 王衣の鳴海の浦をどひし人は玉あはこそあひゆる物を
 卯の花は咲てあらぬに高くと白雲のゆ時鳥なく春花は
 咲てちるとも又しもとはねそが国の滝のひききたえそろかことく
 い(るに

多度川の滝津山川にし絶せて氷とけの鳴海の海に
 なるみかたや(の塩路の絶さらはなも田跡川の滝をし河内は
 よしえのぬしか草枕 記の奥に書付給へる人々の歌を聞て
なからへきいん
 たえじとそ思ふ

かきつらね都にいかぬやちたひのくひする物は君のみならぬや
 こは中養父公羽のあれも又手携りて綾足の公羽か
 許をとほまし物をとの給へるを思ふ也

君がこどかけもはつしもならませはわも身をたに事つてましを
 こは吉田のつぐの難波津にわたるときかはやかす

ともわかめことをたにこつてましをよめると思ふなり
 玉の声きかまほりして旅にやはその妻の子の恨てんかも
 こはせむたの舊貫の「君をこそ旅にはやらめかくてのみ

玉の声あることはきかなしとよめるを思ふ也

君ならてあれもいくたひかかりねせしに難波のあしの春のはみす

こは増宿大徳の難波津にわれいくたひかゆきかと

浦めつらしき君が言の葉とよみ給へるを思ふ也

友なひて矢橋わたりねとあれし聞のもおひゆきて三人と成

こは杉原勤のまのふたひもかな君はしもゆきかえ

時はあれもこそともにともな(といへる長歌を思ふ也

つくの君かめらをとたふ我はしもめと^{たに秋}國かへて事つけましを

こはつくの君を思ふ或國この辞は國にかはりてよみし也

よしえめしよりおこせたるみくさの題をよめる

卯花。夏木立梢しけれたそかれにこのくれやみをてらす卯花

久かたのみぞら立おほひくもるとも卯花くたす雨なふりそね

風もよし塩もかないぬ舟人が声をはにあげて船出すらくも

夏相聞。頼めつくとしまては短夜もちとせふることおもほゆらくも

いきのとに物思ひをれば夏の日のやくれかたき物にせりける

梅の花ちのひ
折し句く

打うなひきめはる草木くさくに野山のやましも春はるめく色いろと成なにけらすや
うるはしきめもこそよらめ能の登のぼの海うみの浜はまひとよもす浪なみのまに

鳴海郷なるうみにありし時とき橘たちばな実丸みづゝ君きみの初はつ而し見み良久なが止と歌うた比ひ給たま留とどに
奉和歌ほうわ

杜鵑つとみ今朝けさ霜しも君きみ仁見にみ之の鶴羽つるは立花たちばなの木のき乃の影かげ吉きち言こと美み古ふる曾そ
実丸みづゝ君きみ乃の加志かぢ阿多あたら做し給たま留とど志具しき例れいの記き知布書ちふしよ乎や見み侍さむらひ互たがひ
作歌しよ

志具しき礼布れいふ里風さとかぜ尔に散ち流り吉きち葉は序つら吳藍ごらん深ふか久ひさ丹穂にほひ日ひ鶴鴨つる鴨
其書そのしよ中なか尔に以もつ室むろ受う平へい等と女むすめ君きみ宣のたま名な倍よ歌うた作しよ給たま留とど乎や米こめ泥ぢい
思おも互たがひ作歌しよ

都母みや留とど那止なと能の留とど宣のたま言こと乎や加か乃の於お加か乃の於お加か美母みは受う互たがひ雪布ゆきふ
同書そのしよ中なか尔に難波なみの男おとこ加か賀が葺ふ耳みみ刈き罪つみ乎や作しよ足あし劔けん止と阿留あ乎や余あま处ところ長柄ながえ
歌うた比ひ繼ついで侍さむらひ留とど歌うた

可か久ひさ互たがひ波なみ多おほ字じ伎米ぎこめ乎や御津おみづ乃の海うみ人ひと尔に有あ米こめ可か聞きこ
同書そのしよ中なか尔に其その長山ながやま尔に加か留とど白しろ云い拂はら止と毛け奈な之の止と阿留あ乎や繼ついで互たがひ

649

帰古牟人止春平之松の白雲

橘大人に奉留歌

650

志可礼古曾花橘の花須良耳鳴海の里止名豆計計良志母
右六首と久佐具佐草となつて実丸へおくる

五月の中こそ淡海のまたしのぬしわかり尋ねき給へる時

651

おもほ(才とふらひきます君に今近江の国をつてを聞かも
年つ通ひし里にみぬ君をけふみまつりつおもひかけきや

652

みぬむがしみまつるけふも千早振ふりし神代の契にやあらん
かきくらし日数ならは(ふる雨の音聞山に^{淡海近江}園なすかも

653

けふ幾日くる人絶し五月雨にみたれておつる軒の糸水
時鳥雲のいつこそ白川の関路に声すむら雨の空

654

雪消て卯花さける宇治川の山吹のせの又しろくみゆ
とひこねと文は^{活用カケ}おこせりかはらしと契りし中やふかくみまも

655

六月よし元主かあふみよりおこせたるみくきの題
蚊遣火の烟いふせみ門に出たたゆたふまななく夜はあけ^園

蚊遣

656

折句 李全

657

物名 きのせの またし

658

同 ひこね、せり川、なみやぶ

螢

蓮

物名 かやり
はらま
秋歌とて

古
体

古
今
体

近
体

同じとき、同じ題にてよみし近体

夏されは煙くらつひな(やに賤か蚊遣のけぶりくらつ
いとしく数なき物を池の(の水にうつりて飛螢かも

是やこのやみまでらせり玉ならん河へにすたく河の螢は

○ 千万に咲つる花も蓮葉の花の白ひにあにしかめやも

はしきやし咲白ひゆる花蓮妹か魚まひになら(て出)

淡路オキ君をいつくかやりなましおくる、花のしほたるうしも

わたつみのあまのかるもにみたれつ、物おもはる、秋の夕くれ

六月廿四日よしえより初秋の歌三躰によみてよとい(れは

あか袖にいち白くしも露おきつ秋は物はす来にてけれとも

風の音はさあふにもす秋つけはいはるの軒にこの葉さやけり

秋きゆるころはわれにあらねはやそこはかどなく袖そ露けき

○ ことこいていはねはこそあれ秋くれはおもひけねく物そがよしき

宮城野の草葉の近体ニアラスうれもわか袖も露路おきそふる秋はきにけり

大かたの秋くることに白妙のつゆけき、袖も哀い川くそ

同しきよによめるうた

- 月に雁露ふく風の音までも涙のたねの秋は来にけり
- 秋はきぬ夕（よ）かにははかりも誰にかこたん 葦蓬生の宿
- さらたに涙のもろき老か身に又秋のきと袖ぬらせとや
- 夏もはやきのふに暮てけふもまた飛鳥の川に秋はきにけり
- 寂莫の苔のとはその白露も玉とまとへる秋はきにけり
- 秋霧と共に立出てふかくこの里とひくれば露のふかせよ
- 夕月よひかりは空に道のくの山石手の山に秋は来にけり
- 老か身に積れる年の秋毎に哀にくたひ袖ぬらしけん
- 秋せれば衣手ひちぬうへしこそ昔のひと物思ひひけめ
- 今夕こよなばらてあはぬもかよ天に在安の川原のいわたらすせは
- せとせかは下瀬あせんを天川はや渡りこねはしきわかせこ
- 秋立ていまたいく日もあらなくにまたき時雨る袖の上かな
- 浅ちふのそと秋風吹なへに葛のかれ葉も恨そめてき
- 何事おもふともなくをそすとしもたなく秋きては穴いひしらす物そかなしき

松井忠貞ぬしの「若ゆてふ滝をたのめる君なれば万代ふとも

老せらましとよみて給へるにこたへて

- 若ゆてふ水を頼みて万代もしかいふ君と共にこそめ
老人と養ふ水のみなもとゆ君か八千代になからぬ(キ)

よしえの「なぐるさの遠そきを」と岩橋のまぢかきこと我は

おもふそいといへるにこたふ

- 立音つれはまぢかけれともなぐるさのはるけきかことおもほゆるかも

秋隔一夜 ○ あすたつ秋やかよひて夕暮のまき吹なる風の涼しき

玉椿 杜若 女郎花 サ 藤袴 忍草 此五種をたてぬきの折句

- 立春をまつこそ人に告にけれ花さく枝にきふるうくひす

- かぎりなき君かみよく位へし浜の砂子のたゆる日あらぬや

- 治ゆる御代は戸せしもなき物を隔てなはてそしら川の関

- 深みどり千代万代の春秋をかけてかはらぬ松の色かな

- 白雪は軒もひとつにふり積りくらせる宵の冥々も有る哉

- 田子の浦に霞八重たつ折にこそふしの高根のしかまくら

かくろへこそその結みに叶はず

山 海 川 池 橋 月 雨 雲
月 月 月 月 月 月 月 月
間 後

○ ますか、み清きころを見てしより契りかはらぬ後も我妻
 ○ つもるともつもれる程やなからまし春山にけふふれる白雪
 ○ 春されははなはさけれどくり山雨殿へたつそくるしかりけり
 ○ 君まつと立ろしら（すしき妙の枕もまかてせよはあかしつ
 ○ 玉川の岸の額になつさひて蛙妻よふ五月のころ
 しかの浦にちかくきよれる波の音もけるけき里に聞（けらすや

○ 橋立の倉橋山とひとはい（とあかくてらせる望の月よあはれ
 ○ つゆさけふ岩見の海による波の夜ともみえぬ月の影かな
 ○ のとせ川滝つせことになつ浪を玉とみかきててるる月影
 ○ 百伝ふいはれの池の水面にやとるも清き秋のよの月
 ○ ちけやふる宇治の橋守いんちよをかけてよわたる月はみて（ぞも
 ○ 君やえ我やゆかんとたゆたひてあたらず月よをふかしつるかも
 ○ おもひききや日なら（ふりし雨はれて雲まに清き月をみるとは
 ○ 月（いかにやしがる雲や心あるたえまのみわたらいてれる影清きこそぞ

十七夜。久望の月はきのふの夕よりいそよひそめていよたゆたたり
わらは友たちなりける人にあまた年（てあひて

めくりあひし昔の友のおもわもてわか老らそおとろかれぬる
よしえのすめ給へるはつきゝの歌枕六首

露

○ 垣もとにはせる稻から中々に朝夕つゆにひちてぬれつも
秋の日は短くも有か朝露のかはかぬうへに夕露おきぬ

鴈

○ ゆくさくさ宿りもとらて何をかもしそかひいそく天つかりかね
古郷をいつ旅立て雁かねはけふしもこにわたり来つらん

鹿

○ あし引の山もろわれよなくに鹿のねきけはいけりともなし
むかつをの浅篠原にふす鹿の鳴声きけは涙くましも

ある人の猿をよめといへるに

○ くもろひに山路いゆけは出石の（に猿つとひていそはひをらく

あし引の山の村猿時しくせ数まかきらすとちはむらしも

人々川瀬の里にそひ給ひつから歌作り歌うたひしのへるを

つばらにしるしにたる垣津旗見よふみそみておもひつけつる

折句

よしえぬしの給へる三くさの題と
唐ひとのきぬにすれると伝へし花の成盃をたれかめてさらん

時雨

かきこもり雲井さわくにあえすもよいたくしからぬ初時雨かも
中くくに雲れる方はしからすて日影てる庭に時雨ふらくも

千鳥

ぬることもあたはぬかもよぬは玉のよすらしはなく浜つ千鳥は
よを寒み独はねしとうれたくも妻こひかねて鳴く千鳥はや

霜

今朝はしも寒しとおもはう(な)庭の草葉に霜相おけりみゆ

初冬

初霜とがなれなりけぬ朝もよしきのふゆをちの露路の玉はも
梢にはちりものこらす庭もせにうつむ落葉は秋のかたみか

雪

とふ人もなきわか宿も冬来てはあさむきさなす風の立日はや
いくよかもまてときまなぬかなし妹か心をしらに吾はくるし魚

雪

わきも子とさねしさわては帰るさに命しぬともをしからなくに
いとしく寒けんも有か久かたの雲柵きらひふれる白雪

白雪はあやまくりそあふみなる伊吹の山のかくろふへしも

きくたにも心さらなり垣つはたしたしくみるなりう主人

安永二年癸巳二月 江戸に在

するかにて。○ あれしよりみまほりせしするかなる富士の高根をけふみつるかし

江戸にて。○ 百重山（なりしな）に年ふともあふみの海をわすれておもへや

（なれりしいふき根をたに恨こしそたに今しはこほしくおもほゆるかも

○ 彦根ちのあせの君をむさし澄かけてこほしくおもほゆるかも

閏三月中の三日時鳥と聞て

○ ほととぎす鳴声まけはいとしくわか古郷（し）をこほしくおもほゆる

○ 梓弓春くははれはほととぎす夏を待たでも初音鳴く也

四月十五日廿時田の主母のやまひによりて尾張にゆくに

○ たらちねの母の病みしおきたらは日数（経す）もおかて早く帰らせ

○ 小治田のあゆちを国にいゆく君むさしおほきにはや帰りにね

○ あしからの箱根のねろのさかしきに石なふみそね旅行あかせ

閏三月聞時鳥

○ くはるも春なる物をいつそか山ほととぎす初音なくらん

海龍上人のよめる題にて春井首

758 757 756 755 754 753 752 751 750 749 748 747 746 745 744
 見 觀 初 帰 春 若 春 行 梅 余 沢 朝 春 山 年
 花 花 花 雁 月 草 雨 路 薰 寒 菜 鶯 雪 霞 立 春

春とはのとけくも有かあら玉の年のこなたに義陰 来にてけれとも
 恨こしやの中山そをすらも春は霞のかくさふへしや
 沫雪も土におちすはくたけしを春の沫雪土におちなゆめ
 いなのめの明行からにわきも子かいはろの方の鶯鳴なくも
 沢のへに生るみどりの若なゆも若菜摘なるすこをしおもほゆ
 打なひき春は来ゆるを植安の池は寒らに氷るにけり
 梅の花さけるわき(の軒はゆもふく春風は香に匂ひつ、
 道のへにたてる柳は草枕旅行我にひとりみよとや
 梓ろまゆみ月ろ春雨にはる草木こそうるはしみすれ
 うらわがみねよけにみ(てさかへつる野への若草)〔虫〕
 常のことてるらん月も春の夜の霞そ影をへたてつるかも
 久かたの雲よりをちに声立て天つ雁かね今帰るみゆ
 冬こもり春さりくれは梅が花咲初につかこそには(北
 かさせれは老はかくりぬう(しこそ昔の人も桜かさしつ
 わきへちにさける桜を久かたの日なら(みるにあかぬ色かも

安永三年甲午雅俗隨筆の中に

朝な夕なはしきわきもかてにまける鏡の家は万代まで

大木曾の里をわかれてかへる我足はゆけども心やはゆく

同九月みのくありかのぬし玉たすきかけてそこふるさす竹の君に

あはすて月日(ぬれはといへるに

○ あら玉の月日(ぬれはあれしも又千年ふるそとおもほゆらくも

同十月彦根横山五宗を哭する

山トシラキとさつき、山トシラキ石ねうつせし丈夫すらに片原の木草の

雪路の消てしとしも

○ うつし植し軒端の松はかはらぬを千代もといひしあるしもいかに

同四年乙未

乙未の秋原正展のめきみ右郷の木曾にて身まかり給へる

をとふらひつかはす、うた

○ およつれか人のいびつる奥十路の岩ねしまきていほりせりとは

七

夕

○ いかさまにおもほしてかもうない子を閨にのこして雲かくりけん
 ○ 限なき命を子らにゆつりおきて世を過しけんはしき君はも
 ○ もみちはの過ては行と村きもの心しこらにのこらさらめや
 ○ いとしく露路けき秋の衣手をいかにせよか家さかりいます
 右は原正展ぬし(よみてまたせしなり)

女 郎 花
 残 暑
 桜 田
 旅 人
 堀 田
 世 能

○ 久かたの天つ神代ゆ天の川「原」せあらすてなからへわたる
 からやゆかん舟乗やせんのだゆたひに天の川門にさよせ更ぬる
 はろくに思ひぞ出る安川ににひはたふれし遠つ神代を
 せの君にいかなる名とかのこしけん柵機つめは其名ならしを
 ○ 吾せは天の川門をぬは玉の夜のふけぬとにこえきてなまね
 をとめさひすとにかもあらん秋の野の風になひける女郎花はも
 ○ 秋きぬとあした夕に露路はおけとあつさは夏にまさりつるはも
 千万と田鶴鳴わたる桜田にわさ田かるなるすこしと思ふ
 海山の峯も荒磯も定ま(す花に紅葉に旅行吾春
 葉風)

も吹つたへてめといへるにこたふ

○ 何すとかあかいさをしに^{ナワシ}香によしならの山風の吹つたふへき
わくらはに風し吹てばこと玉のさきはふ神の岡にこそあらめ

田廬集

安永五年

丙申

六月十二日

鈴木の早稻根の宅のうたけに作

千早振神のみより久方の天の日次としらしくる君か
みよく高山の高き君らしつ玉きいやき人も
村きもの心とは夏草の言の葉ことにおく露
の白玉なすも 虫喰 しつ玉きいやし十くとも
おく雨露の玉ならすとも 大島云コヨリヨミ出シテヨシ 思ふ心をいひ
のは(ことひひしつ、けふはしも爰につとへてたぬし
けく酒みつきしてあそ(とそけふのあるしかあへ
ますよしと

○ さかみつきさかゆる家に思ふとち相のむさしたぬし^酒ともあるか

七 夕 ○ けふならて渡る日やある百たらすいそぎてこがな夜のふけぬとに

六月廿八日坂本のかなへの主薬しの道学にせんと其道のうし

の本に至り給へるを賀て

○ うつせみの世の人皆に草つみ病あらせぬ道はしよしも

○ 大汝すくなみ神のかみ代よりつきし道そおほになもひそ

○ 山川の岩本たきち行水もくたけすてやは玉となる(き)

西村の海辺のもとめによりてよめる歌八首

784 海辺夏月 月夜よし風もすくしくあゆちかたちたの浦わに秋やちかけん

785 夏 旅 ○ 皆月のあつけき時に百重山さかしき道をこえてそあが行

786 滝音忘暑 ○ 岩けしる滝つ山川ゆく水の音にし夏をわすれつるかも

787 かたまつ秋 風をたにこふれはともし小秋さく秋の夕をかたまつ我は

788 寄薄衣相聞 夏衣うすきころも思はねはなそしも人のあをうらみつる

789 物名 なるみのうら ○ 男山さか行時もありこしを老となるみのうらめしきかな

790 草まら旅にいゆくと古郷ナカをも立ナカへなるみの浦もなよも

791 七 夕 かけかわのかきろしあれば天の川かたれ時もまたわかれぬ

あまるもてなりあはぬ所をさしふさぎ、今は相なも天の川辺に

同五年

丙申

歳暮

池の面にすむ水鳥の名のこもやをしけき年の暮春けてぬめる

年内立春

との内に春きたるらしいち白く吾家の園に梅の花さく枝さけり

同六年

丁酉

立春

ぬは玉のこの夜あけぬとおき出て朝戸ひらくに春は来にけり

東風暖簾

春さんはをすのすけきにかよひ吹朝こちも寒からなくに

正月三日鶯のなくとききてよめる

春立といふはかりにやけさしもそまたしき声に鶯トウバズなくも

我はもや寒きといふと冬過てやあたくけく春去にけり

かしのみの独のみぬる我宿のまきの板屋に春の雨ふる

御執ミトコの梓シラカシの弦はけて春去ぬれと風の寒けさけり

みちのくの足立にたてるしらまろ春の物とて白ふ梅かも

800 799 798 797 796

梅

寒

雨

懐

述

春

余

立

同

六

年

同

五

年

同

五

年

同

雪

古今集と

○ よのほとろ雪零置る雪は春なれはけさの日影にけなまくとしも

玉しきの平の宮にえらはしく古今の古アとぞこれ

大君の命のまにま朝もよし紀の貫之のえれるふみあはれ

越人ふけんふしに

けしきやし此した玉氷つ得てし玉かもおのつから得てし

玉かも此しらたまは

水底に雪しら玉いかにして得てし玉そもこのしら玉は

時鳥

四月九日 会兼題

日並てまでときながす音聞の山ほどときす事にし有けり

時は今は夏に成ぬとほときすわき(の里に声かれすなく

葎生のあら草たちし我宿の垣ほに咲り愛き卯の花

真木立あら山(るの山賤か垣ねに咲る卯花しあはれ

暮雨の東にゆくハシギム 人ノ名トキヨユ

吾脊子は東にいます年をへて帰りん日をいつとかまたん

道のくに君ゆかまは宮城の、秋折持き我にしめさね

杜若

相聞 寄里

春 暮

蛙

早 苗

恨

悔

逢

折 うめのはな

同 ふくは
かま

鳥居 うしの東より 歸りたまへるに

東なるかどりの海の白珠を拾ひもたりしあまひこあかせ

うなひぬしの「住の江のこはまの蜺あけもみす玉つやか(す

妹うらめしといへるに

かきつはた咲白(るをみることに妹かゑましひしおもほゆらくも

小治田の年魚市の里に妹をおきて旅にしをれはいけりともなし

けふのみと暮春そいゆる梓弓春はけふと暮暮ていぬめる

ぬは玉の夜やふけぬらしはろくに(なれる小田の蛙きこゆる

ぬは玉のぶるはすからにむしろ田のいつぬき川に蛙なく也

田跡川の水をせき^関れて少女らが五百代小田をけふぞういなる

誰ゆゑに物はおもはすうつた(の妹をのみこそ恨ておもへ

劔太刀名谷不告はかくはかり息の緒にして我恋ぬ八方

あら玉の年月(つゝ恋にてし愛交吾妹にこよひあへるかも

うくひすもめて、鳴らしのきはにて春はきぬると鳴初声は

ふくからにちらまくをしみサ秋の花風のこころにまかせすもかも

堀田氏求

契鶴 遐年 六十賀

忘草生ふといふなる住吉の小浜のし、み明てみめやも

君ならたれかみはてん松かねに群居る鶴の千代の命と

右は何某のわしの父君の六十賀に遠き世と鶴にちきると聞くとうたへ

七月朔日会セテ歌

求めたまひつるにきたへる歌

萩

たぞかれと人とかめめや天川わたらひきませ暮をまたすとも
玉まきのまかいし、ゆき妹かりと今宵我は行天の川つと

立 秋

さにつらふ君にみせまねもすまにうゑし秋萩秋今さかり也

雁

秋立て幾日もあらねは此ねゆる朝けの風は袂す、しも

月とみて

きのふこそ春は過しか雲の上にはや来鳴なり天つかりかね

霧

千早振神のみよより有かよひさやにてらせる月の影はも

秋 田

さらぬ谷はれす物おもふ物ゆゑに秋の山に霧立へしや

七月十八日に立て廿日朝本居先生にあひてよみて奉る

朝かすみ井戸田里は秋の田のわさ田のほたちみのりたるかも

いせの海千尋の浜に愛八師玉はよるとふせ、いらかた
錦のうらに浦くはし貝はよるとふその玉をひりひてし

反歌

おなしき久方(よみてやりしうた)

かたたもとほりこしくもしるく 吾脊子が愛き
 教に其かひのかひこそ有けれ やりく に磯間いたとり
 浦つたひひりひ得まは白玉真珠
 伊せの海の清き渚の白玉を袖にこきる、けふのためせ、

七月廿五日 松坂山領松院歌会に
 阿倍仲麿

○ セ、す竹の君かめをほりはろくにたもとほりきぬ道の長手を
 はろくと来るしるしあり 愛八師君にあへらくたのしくも有か

唐の遠境ゆ三笠山ふりせけみけん君はしもあはれ

別恋

○ 青海原ふりせけみつ、うた(りし君か遠名の類ひあらぬやも
 ○ 別れねとするわがならし曉のしこの夜鳥鳴つこもとな

同會につとひ給(りしうま)らによみて奉る歌

○ 申くに不逢しあらはけその朝けかゝるす(なき)別れせましや
 みどりなる松坂の名にあへてこそ 猶万代ももろ人にあはめ

本居先生に奉る

あきつしまの大人なる物を飯高の人とそ人ももとなおもひし

同しく昔日山辺五十師原之考といふ書言と

宣長うしのみせ給へるによみて奉る歌

- 我せいかこいとをくし山の辺の三井の真清水くみてそあかし
- 山の辺のいしの原なる真清水は汲てのちこそさやけしといはめ

花手向てふことと

あひにあひて旅行道の桜とし手向の神に手向てましを

九月十日兼題

萩

紅葉

寄名所

松 虫

秋か上に秋風おとなふかくしあらはわか庭の面にうゑすあらほと

時雨の雨いゆきふれは争兼岩倉野(は色付そめたり

大荒木の浮田の森(に生る草の老たる草葉馬もはまたくに

諸人の集ひあ(ぬる此よりに誰にこよとか松むしなくも

鴨 鳴
同じ長うた

梓弓夜音の遠音に声立て鴨そ鳴なる月清みかも

鴨金ははるけきこゆ鴨の音の声きこゆ也鴨

かねきこゆ愛鴨鴨そなまなる

天地とわかれし時にあしかひなすあれまし、神し尊きみかも

こころなきあらしにもあるか草枕旅のかりほにふくへき物が

まなこなき数なき中にかしのみの独高とふ流星けや

秋の田のわく田かりもてうま酒と三輪の祝かいはふ杉けら

大ひえやをひえに立る神杉はいくよ神ひそあなにかんさび

白波のよする浜ひをかかくにいゆきかへらひ鳴千鳥かも

常 尊
左夜嵐
星
杉
浜辺千鳥
九月廿五日

鹿がかん山とみしより稲筵川名の山にいほりすわれは

秋ふかく来てしみつれば錦がす川名の山は今せかり也

同じ時長うた

秋山のもみちみまくと高なへて越こし君ら高蔵や

鳥井のうし水蓼を稲積のわく、行雁のつら圍

逢後不逢

仲歌此歌イカ

の君坂本の津らねのわかせ御民われ國の道まろ
かきつらね川名の山と夕星のかゆきかくゆき山川
を高みせやけみとおもしろみつゝも

あひみてゆ月もかへねはおほしみ千年のことも我恋わたる

浅ちふのちふの枯野に冬さひて草のへ白く霜相ふりにけり

天の原ふりまけみれば君か月もまたいらぬはおける夕霜

みゆきふる冬にしなればあし引の八尾の椿花咲にけり

せにつらふ君か垣へにをとりかり声ふり立て来なくもすかも

も 椿
も す
年のくるゝとをすしむ

をとめらか手玉もゆらにおるはたのはたやこしもけふと暮春や

武加志奴昆

アマツ カミ ヨノ ムカシ シヌベ ル ヒトラ ツド ヒテ イミエグリノ

天津神代乃昔志奴倍流人等都禊比豆古風俗乃

イナタ シヌヒセム ト ツモゴトニヌドチ ツツタリカラ

宇多志奴備世年登毎月円居四都々乎里加良

人々
夕
日
晩
夏
相聞
藤
山
暮春
鶯

安永六年酉二月九日

田中道麿

人の歌は田舎で公羽のよこに記

なつされはきなくひくらし此宿の木末ひきてきなくひくらし
七名かた待秋やちかからしかた(涼しき夏の夕暮
咲にほふさゆりの花の白笑に妹かゑまひしおもほゆるくも
かきかそふ三村山の山松にかゝりて咲る藤の花はも
妹にほふ花とそみつるわか宿の垣ほにせける八重山ふき
春深みかすみ隠りて水鳥の青葉の山に鶯なぐも

乃花尔鳥ニ見流物間物遠末久良五登々志天
作出鶴歌等乎書志流志天曾我婦美乃名
乎武加志奴昆登名豆久流尔奈尔毛

躑躅
なし
短夜
橋

わきもこかひれもてるかに七につらふ山つし咲りひれもてるかに
咲をくる山梨木の花唐人のうへも恋けり山なしの花
ふせ庵のあしのまる屋におく蚊火のくゆるまなしにあけぬ此よは
くたかけの八声やいつら夏の夜はた、一声に明にし物を
わきへろにさける橋此あめに橋ちらすそら立花を

田夫世集

同七年 戊戌

立 春

○ 天原ふりせけみれは八重霞棚引春に成にけるかも

○ 打なひき春さりくれはみわたしたにたてる木草も春七ひわたる

同 長うた

○ 打なひく春せいは吾宿の「初」しみに咲にほふ
梅が末枝に尾羽打ふれて鶯なごも

冬こもり春を深みか我園にきふる鶯いまたながすけり

○ 七は形錦の紐と夕和に海人の釣する青海の原

○ わか園にたてる梅木春雨にあらそひかねて花咲にけり

梅海 鶯

○ わか園にたてる梅木春雨にあらそひかねて花咲にけり

寄 里

○ 神風や伊吹の里にかくしたる其妻の子と会みらんか

○ 小治田の我夢の里に妹をおきてあはぬ日まねみ歎きつる

○ 春されは花さき七かる藤浪の里のみ中にあひし子あはれかも

○ 終日にみれともあかす隱国の泊瀬の山の山せくら花

○ 引網に大小魚のよる魚の夜昼とはす恋わたる鴨

山 桜
寄 魚
詠 鳥 長 う た

○ 花鴨とをしこそは鴨のまにふたりなまらひみをしのまに

○ 妻とひすらく神世ゆしからしをし鳥も鴨も

○ かけまくもあやにかくき天皇の御代さかんと

○ 大君の国さかえむと紀の国の七ひかの野へに

○ 五百万千年とかねて鶴子産そこむなる

○ 大皇の八千代とかねて木の国の七ひかの野へに鶴そこむとふ

同 長 歌

わくらにはに二人ぬるよをあけぬとし夜鳥さわく

あけぬとし別てくれは帰るそこの道けしくらしゆけとく

寄 水

藤

燕

遠 江

浦島之児

浦島之親

○ いまた夜ふかし何しかも大をそ鳥のころなき夜
鳴はしにけんしこのしこ鳥

○ かくしあらはわてもこましを悔しくもしこの鳥にあそむかかれつる
大をそ鳥に

○ 奥十川岩本たきち行水の行方もしらす我恋わたる

○ 桜花咲てちりにし岡ひにそ次て白る藤浪の花

○ 去年の夏す立し鳥かいなをかも時イカによりしつばくらめかも

○ わか妻は花にもかもやあすよりや旅行イカあれはせいでゆかん
イカ 東歌ニアリヤ

○ そくらくに妹かかためし箱すらすをしたらる人のひらきあけつ、
カサシテカ

○ かためし妹か教コトをそむかすはまた常世イカにいきてすまんを

○ 鯛つるとうなひをせして常のこと出行しあこ日をへて帰リしこれイカは
月とへて

○ 帰リしこれねせんすイカの田時をしらに住吉の神に

○ ぬせむけあらうらしてゆふけとそふにゆふ浦イカののりて

○ かたらく汝かこふるかなしき子はわたつみの神のをと

○ めと推乃り住つてあれと父母を恋つてそとる吉郷

○ をしぬひつてあれはおそけやもかへりこそこめ早からは

真問娘子

末珠名

独去娘子 ヒトリスル

嬬歌 カビヒ

葺屋処女

年はしか(じ)おそからは三年の程に白波の立
 帰らんそしかのみになほもひそねと我に
 かたらく

- なおもひそと人はいへとも帰りにん其日しらねはいにかともなし
- ひたせとも錦木やなすかつしかのまの手児なかいふしておもほゆ ハイカ、
- よりかくれいひてし人はまゝのろのそこを深めて思ひけらしも
- かぎせ(に)またし、君はすくなくも末の珠名を思ひけめやも
- むなわけの広き吾妹と名か、せる珠名娘子をみんよしもかも
- つまかある独かぬると大橋を独行児にことばやしと放とはむよしもかも
- 大橋のけしの板にも成てしか独行児かふみわたるかみね
- もはきつを牛掃神ウシハカリもゆるしたるをとめ男のか、ひしおもほゆ
- 神たにもいせめわけふとうんむそは人目人こといとひてましやこといとひてましや
- 知奴男うなひ男らたけひつゝあらそひけらしにせん林そのをとめけや
- しゝくしろよみにまたむとしたは(て)ちぬ男にしよりし思ふ物を
- をとめづかこなたかなたも岩構(つくる)ちくつきみればかなしも

910 松浦佐用姫 ○

遠からぬ旅のけにこそ妻をもつていゆくといへ天雲の
奥かもしらぬ唐国に渡りいますと海原をこぎたむ
あがせみの舟をしはしかへさねしまらくをこちこそね
をと高山の岑へもとよにふみたけひ足オリ
なけきこひまるひひれふりしより万代の今の
をついにひれふりの名におひけらしひれふりの
たけ

913 912 911 五十師原 ○

是やこのさよ姫の児か毒乞に山の名かすひれふりの竹
物もけて鈴ゆのみふらは此竹の名におはあやも松浦さよ姫
石の原山辺の三井を見ることにその行幸のいにしへおもほゆ
青山の色がながしく朝日なす浦くはしもよ山辺の三井は

914 九の娘子 ○

浦くはし公羽の歌にかまけなんこのをとめおもほゆらくも
いなもうも友のまに奥つきのなひきよりけんをとめしあはれ

917 916 915 防 人 ○
伊 豆 ○

百隅の道をこえきぬしかれともありおもしらは忘れせなふも
いつの海に浪のよるのすしくにいけなる妹ら忘れてもや

遠桜

江見

○ ○

とたほみいなせ、細江にひく舟のみとひく綱のたえんと思へや
 花はし桜見はもつし花にはる子らがせむと思ひ
 し人のいまのまにこひしわたれは年のはに置ゆく
 とふ人も山菅の乱れしぬひつしかれこそかしのみの
 た一人してかきかそふ二人の君らによりなんよしの
 なければさ渡りの林に入て木にすがり命しにける
 花くはしそ乃桜子はも

926 925 924 923 922 921 920
春木時二上常信遠

月晚鳥神総陸濃江

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

御執しの梓の弓を春のよのかすめるそらに月わたるみゆ
 木晚のしけかるなへに時鳥わか岡のへと来鳴とよもす
 ほとくさす時ときなけは吾岡のこのくれ般石に涼へつるかも
 掛巻もあやにかしきき空かそふ大八州国生し、大御神
 セよはあけにはもしつけし夏麻ひく海上浮をいせこきでいな
 筑波岑のにひ来まきのさぬもかも妹になそ(マ下にまましを
 時過し須賀のあら野の時鳥見らとときかは何かおもはん
 雪つみし木(の林にたてれとも妹をしも(はせむけくもあらず

寄泉部

橋

七十賀

柏規

○ 荒磯アライソ回マに朝な夕なにかつく海人のいさづかしもよ吾恋らくも

○ 菜ナ鯉ニ麻マ登ト我ガとたのめて尾張田の梅田の橋の絶トにける鴨

○ 多度山タタに立る柏木神とひに万代かわれて学マナブはゆらくも

○ 住スミのえの小浜の規ノリしゞにけそ学マナブへますらめ万代まで

雀スズメと長ナガうた

神風色カミカゼの国の飯高イヒタカの愛アヒき里廻サトユキに木晚キノノの

しけき卯月ウサギにこゝにありてあがきく時トキに時鳥トキトリ

なぞなかなかな鳴ナ声コエきかんとと諸人モロトのつとひ

まをるを心ココロなき、年トシの時鳥トキトリなぞなかな

いもく不待マタはあらねと時鳥トキトリけふのつとひになくよしもかも

吾宿ウヤドの花橋ハナハシはとかりなりほととさすをトやナぞモもキなカぬ

長浜ナガハマに立る若松ワカマツまつとしもなはしらすやも山ヤマほととさす

いつこには鳴ナらン物モノと飯高イヒタカのこの里サトのノほととさすはトも

時トキしくニ雪ユキそッりケる天アマ雲クモもいゆきはハかる富田トミタのノ高根タカネは

富士

反歌

975 974 973 972

暮 寄 時 反

秋 木 雨 歌

○ ○ ○ ○

あし引の山のたをりにある雲のたゆることなくせかけえいませね
 秋山の紅葉あはれとしし物を我となやましふる時雨ふりきぬかも
 つくはわのをひもこのもに立ち木のしけき恋をも我はむるかも
 秋さぬといはくもしろく中嶋のおこしおこしの小田におくてからすも

971 970 969 968 967 966 965

魚漁夫歌翁にかかりて
 屈平にかかりて
 物名かきもち
 寄山賀
 霧
 絶たる恋
 寄山祝

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

大夫とおもろきみかなそもかく荒磯の浜にあそりせすらん
 人比白ほににれる中に山川の清けきからんあれそ大夫にはある
 今そらに野へにはゆかし我宿のまかきもちに秋のせけるを
一万山花
 いほ万千いほ万の年ふとも田跡のみ山のつくる日あらぬや
 青海原ふり酒みれは百不足いらか崎に霧立わたる
 かくのみに有ける物と早川のたえしや妹と契りけるかも
 高山はあやき物かあさけには霞棚引夕けには
 きり立わたる春と水は花さきをり秋つけは
 紅葉にほり山石ほにはこけむしさかへ川へには
 たきち浪よる山石ほろのときはなること川波の
 たえ七るがごと万代に君はいませと事ほきまをす

詠

田

○ 大かたにつかへまつらん八束穂に秋田のほたけ七かえたるかも

十月七日なるとよめる

人もあれも打たふるかにいにはしくもよらすなみにそおとろかれつる

清水廻録

松年賀寄岡

まつ火のしこみ神の浦をひて清水の里にかきこらひたつも
みかりはにつかへまつれるとみの花とみせかえつ八千代いませね

中養父

中養父

コハ中ヤフ主ヲイタミタル歌

かくのみに有ける物とあふみの海見にことありし我脊の君はや

○ 行川の過にし君とあふみの海へたによる浪しくおもほゆ

寄妹脊山至誠院賀

○ 幸くあれといけふ心け木の国の妹せの山の神ししらせん

寄草祝

あし引の山高草と君か為つみてまたせなたけらせんかね

ちからつよき女をみて

たわやめとなどかそといけん岩戸わる鈿の命の手力なすよ

○ あふみの海仲にすむとふには鳥の沖長川のたゆるひあらめや

○ 朝ひらきこき出てみれば高嶋のあとの水川に雲霧立わたる

霧祝

○ 朝ひらきこき出てみれば高嶋のあとの水川に雲霧立わたる

恋 霞 草 鴨

- せにつらふ妹とおもはく毒こもる屋けせの小竹の忍びつるかも
- 梓弓はさそりくれはおほしくひえの高根に霞棚引
- 古草に新草交り高岡嶋のみとの勝野におひにけるかも
- せし浪のひら山風を寒みかも鴨かねとわくさよ深みかも「走ハヤカ」きまてに

安永八年乙亥

立 春 田 跡 川

- ぬけ玉のきのふのゆふへ雨やみて今朝しものちに春立をめぐつ
- 落かさくもりたきち小雨そほふる田跡川の滝あふたりのほとりは夏も寒けし
- 滝つ波おほによりてはいてましの大宮所うせせらましを

六月廿一日

あま彦あまひこの江戸にゆくををしみてよめる歌

- 東路は行あしとそいふするかなるあへの夏道に馬かへわかせ
- 武蔵むさしさし旅いかりたす君玉川の玉ひりひきて我にしめさね
- 夏なれは君かこえ行いかり大井川袖つくはかり浅からん物を
- あつけきにあせかたなけき木根取箱根のねろを君かこゆらん

同廿三日真竜君へよみておくる

○ 音に聞目にはいまたみぬ遠江豊田の君をあひみつるかも
同じ時真竜ぬしにつたへてひち丸ぬし(つかけす)

なる神の音にのみきこし粟田の土丸のうしにあふよしかも

七月朔日会に七夕

○ 天の川雲立わたる今もかも犬飼星の舟出せすらし

和名抄卷廿一名

安永八年亥
霜月十八日

伊勢屋忠兵衛もとめ

冬山月

○ たへのほにみゆきふりおく^{たる}山のまのせこらえ男たもしきろかも
○ かりおける雪ましろなる高山のみねへてらせり月夜そやけし
いものきてすふしくも有か冬枯のまの(寒けき夕月よかも)

安永九年 庚子 四月有尾へよみてつかほす
賀歌

○ 松木乃常盤 堅盤尔檀木乃弥立栄 産子乃

イヤツキクニ マサキツラ タニルコトナク イクヨカモ ヌキクノ イヘニ
弥継ミル 正木葛 絶事無 幾世鴨 往来之家尔

酒

カタハラニ マナキバシラタテ コトサラニ ニイムロ ツクリ カアラサス
片原尔真木柱立事更尔新室造 香青成

タミトリシキ タヌシケク スマス アカセハ ハナノキヲ
疊取敷多奴志気久住為吾背者花木乎

ソノベニウチベ トキクノ ハナ ミントカモ アサニユウニ
園边植 時夕乃花将見登鴨 朝夕尔

トモトラツトヘ サカミヅキ ノマン トカモ アカセ コガ
朋友集酒美豆伎将吞登鴨 吾脊子我

ココロヲ シラズ ソラ シラン ヨシノ ナケレバ
情乎不知 其乎将知 由縁乃無礼婆

カニカクニ スモヒマドフラ ストメラノ ワレニ カタラク
右左尔思惑乎少女等之於吾語久

ニヒムロノ コレノアロシハ チハヤブル カミノミヨヨリ
新室乃此之阿呂自者 千早振 神御代從

ツギクニ コトヅテク ラクク エルコトラ トストミマシテ アカラヒク
継尔言伝来良久古言乎 貴坐豆赤羅引

遣

ヒルハ シミラニ アヒスモフトモヲモ ツトヘ スモフドク
昼者 知美良尔 相思友乎毛集 思杼知

コトモ カタラヒ 乙ルフトニ オモヒヲノベ 今ラキモノヨロ ヤラント
事毛語比 古言尔 思乎延 村肝乃心将遣登

サニツラフ イモガイノチヲ ヤマクツノムカヒマシツ
挟丹颊合 妹命乎 山多之豆乃 迎坐乍 烏玉乃

ヤラ ス エニ マタマ テクマラ
夜乎巢柄尔 真玉手玉乎指替 松枝之

ハカエヌガコト カシガエノ サカユルガ
如不葉变 檀枝乃 如荣 五百萬 万千秋尔

トキハカキハニ タエヌヤ チキリケン トラム
正木纒 不絶哉妹登将契 夜床之多米登

イタクヨカモ
幾世鴨 往来之家尔 傍尔 此新室乎

ソヘ
作副 君之為住登 吾尔告尔

新室曾弥可栄春去者又若变有蛙手如
サカエナシトスベシ
 ワカカヘリラル
 カエルテムゴト

松根の求給ふ色紙に書し歌

天地尔通照南莫^ナ困^{クニ}君末通女之所持真白珠者哉

九月中旬遠州真竜 参り給ふわかれに

別 娃^{ヒメ}さに別むけふを不思て吾世の君にもとなあひてし

今日けしも豊田三侯内山の真竜の君を別れかねつも

賀 五百万千秋も遠江引佐細江の絶^{ツツ}ひあらめや

○ 遠江豊田の穂田の八束穂の靡きさかえむ限しらすも

○ 京田の奥手の稻穂うれとおもみ打伏までに栄つるかも

○ とかよもちにふにふみて二侯の里の七と久秋田かりすも

平尾の栗田真菅ぬし十一月中旬に真竜君に

たくひて来らせしに送る

山川し中にへなりて玉たすきかけのよろしき遠江かも

○ ことごとそ遠江の国といはめ近くて人とあひみつる物を
ひちまろへよす

七形の土磨の大人と聞しゆもいまたは三年と親く所思
みかにはとせしなほてたるあられふりとほつあふみのいなせ江に
長うた

白玉はありと人はい(とひりひにゆかんいとまなみよしを
なみ、ひり(と人はい(ともいゆかねと人はい(とも、
旅立てゆかんいとまなみよしをなみ

大津なる^{山テ}管望のしけえか志賀の都の跡の今は山はたけと
なれるよりほり出たるこそ我に得しめし此瓦のかたわれを
又ニまたの^{白ス}またつやしにゆつる時にその古瓦にそ(たり
けるつた

田中の道磨

しけえか得しめたる瓦を又真竜にゆつる時に瓦に書しうた

○ 石走のあふみの国せ、波のしかの都に宮はしら
ふとしきて天のしたしらし、天皇の大御代の
大みいらかふきおほひ日のみ影とかくらしく
その瓦そ此かはらけも

1017

反歌。
真竜やしへ

ふりにし志賀の都のみあらかにふきし尾そおほろかにすな

1020 1019 1018

歳暮。

冬立ていまたいくかもあらなぐにいつの程そも年の暮ゆる

鳥が鳴東路の遠つあふみの曲豆田のふたまたふたまたに
立る松の木きはかきはにせかえね曲豆田のふたまた

1021

松坂紀
朝 鶯

安永九年 庚子 正月
春浅き朝けの風を寒みかもねぐらもいぞす鶯鳥のなく
四十七言のうた

1022

すみの江なるたるにせをとねわせうゑぬいねかりてよ
おちほひろへ ころそゆしも むきまけ あはぶつ
くれや

1023

ま た

おきつなみこゑせぬうらまひろりをるふねや
すくにの ゆたけしと われもめてる ちいほよへ
せかえあそはむ

1024 題しらす

梅すも、桜山吹藤かにはあしひにつしつはき、卯の花

1025 天明元年 辛丑
立 春

白真ゆみ春去来ぬと素名の多度山たと山に

霞棚引のとけし素名の多度山

○ あつせ、ゆみ春去来らしあゆちかた知多の山へに霞棚引

1026 三月十五日 花契多春

○ 春ことに咲き花と共にこそさかはえまさめ万代^{ゆくらの}までに

1027 三月九日 至誠院会に 寄霞

春去は立ち霞のおほしく一めみし子^児に恋わたるかも

もとなくせ、

1028 天明四年 春より夏にわつらひて打こもりをろ あひ

たに心にうつり行年をみたりに書つづく

池水半氷といふ題にて歌よめと人のいへるに

池水にしかもやまきのふ入目しけさ出みれは半氷れり

1030
竹寺思西人

ふたかりの妹かり行とたゆたひてたもとほるまたとよそあけにける

文政六年八月十二日記人 本居 大平
八月十七日 見早 若山本居 大平

よろこひなかしといふとしの二歳^{多とし}

睦月中の九日 これをうつしぬ

吾嘉永二年正月十九日
1849年

松下志け蔭

この文はもと堀田梅衛ぬしのもたるををしへ子
小塚の直持と云ふ人 こひゑてしみのすみかなるを
とり出てうつし置ぬ また我ゆゑよし有て
うつしとりぬ

萩

萩我字倍耳秋風音奈布始是之阿良婆
吾庭乃於母耳字患受阿良麻之乎

黄葉

鐘礼乃雨弥敷布礼礼婆爭不得岩倉
乃野辺者色附始多利

寄名所

大荒木乃浮田乃森辺耳生流草乃老多流
草葉者字馬母婆麻奈久尔

右三首

田中道磨

大館何かしのいもうとなるうらみにかとろの君いとうつ
くしやかにて歳はととあたり二つとかきくを
いとさとく歌の道をしも好めるまなる物なく

おいとまき心にくいなんある其七まのみすくしかたくて

名にしおはく花橘のかをること世にしるはかりせかえ君

手向草の長うた

ちはやふる神の御代より伝はりしその古言を

つばらかにたどりしりましまづばらにセソリ

ましけるあがた居の賀茂のうしはたふと

みて人みなあふぎともしみて人みなしぬび

人皆しわすれぞかゆることとも名をもく

鳥がたぐ東の国のひざしなる大城のもとに

縣居にいへをらしていにしへのことつたへ

てしあがたみの鴨の大人いましも君がいそをゆ

古言を人みなしりて人皆のしぬびぞわたる

あがたるのかものうし

反歌

浦かすみ
山時鳥
川秋風
里雪
題しらす
寄髪
秋立ける日鶯の鳴をきいて

武蔵野のそとぎがきざし音のみも名のみも吾はわすれかねつも
知多の海にかすみ棚引あゆちかたあつたの浦に春立らしも

山松の木間立具吉かきかそふたむらになく時鳥

白妙の袂すくしくあし引のやまた川原に秋の風吹

里の名もことにしありけり冬とせれば建田の里に雪ぞ降たる

あら磯の浪をかこみ舟はてゝあても寝られぬ千鳥妻よふ

わけ玉のかくろまゝもか朝ね髪みたれて我にも思へどや

秋立ける日鶯の鳴をきいて

春とおきて時こそ有けり日くらしの鳴ける園の鶯声

枇杷鳴の川通なる大野木の堤年毎の五月雨にみかき

増れるにはきれくつろく年もありて田にはたけに

そこがはれるもあなるをうれはしき事におほほして

かしくも思ひばかりましてこの川原の渚とも

のつちすなを 取はこひ堤のうへにつみあけしめん

とおもほすみ心と聞じりて民のともから

奇偶字

おのかしゝかの川辺につとひつゞ日にく大工を
 はこびてつゞうしめなんとすうよ天明のころ
 どう年の冬の末にはしめてあけのとしの春の
 今も猶しかりかしくも君と民とうるはし
 かるためしは近き世にもきこも及ねは後の
 世にしも伝へまほりしてうつし絵に
 せう心と聊そのはしに書つけ侍り
 なんある

わさうたに思らく

おほけなく君がめくみのむくひわがする大君のめくみしろへき
我がまらなくに

十五十九ニハニハ七百一四六ハセミニ百千九三百九三
 年毎に来る春は猶いちしろく花咲白ふ千草百草

コノウチハ大千ヨロシ
 年毎に花さく春はいちしろく千草百草まきけひしに

是ヨリ大平大人ノ点ナキウチ也朱筆ニテ〇傍注ハ植松茂岳也〇ハヨシキ歌也

茂岳云々ウシノニアル

人ヲオモヒテヨメル

春

ヲ一歌大平何事ニ解カシ

月

道万呂

70

武蔵野に君をみらんをけかれなく滝に霞段む春のよの月

帰

雁

春の雁武蔵の原を過行は帰りはやこと君に告てよ

時もありて雁はこしちに行ものをあかもつ君は帰り来まきぬ

72

春 草

今けしも春雨そき武蔵の草は皆から緑なるらん

73

三月 尺

こし方はあつまときしに行末をしる人なしに春そくれぬる

卯月にいんと契りし人に遣しける

卯月にけと契りしなへに今年のみくれ行春のをしからなくに

旅宿名目

草枕古郷こふる我宿に後のこよひの月そ宿れる

社半ノ半ノ字

俗字ナリト

大平云

難波ニ梅とヨムハ

後世のヒカフト也

大平

立 春

冬木成春は来にけり梅かえに花のこごとくカイカ、とそく春は来にけり

恋古体

いたづかのいるもしらすてわねかてに我する物は恋にせりける

国名十

表云 出羽や いそ也 ぞと云ハ俗也

出雲 伊豆 甲斐 大和 信濃

出羽 伊予

陸奥 紀

安芸

○ いうもく境山とし名のたてはいよとてらとむ月の秋には

祝言

君か代礼子にくしの教ツルのなかれあふかも老人と養ふ道そ田跡川の水

関時鳥

時鳥今一声カマほほしむいよ越らき関の藤川

六月十七日兼てよめるなぬかのよの歌

○ 八千鎰の神のみより久方の天つしるしと隔て

たる天の安川小秋とく秋くる毎にどしのはに

我は渡りぬ上つ瀬は波けもけやし下つ瀬は

石漈ふかしみつ粟の中つ淀瀬にせにぬりの
をふね受す糸玉巻の真棍しくぬき曲豆

はたの雲と帆にあけて只渡り渡りそあか

ゆく妹にあはん為

○ けふ天をかきてならで渡る日もある百不足いそきてこがな夜のふけぬとに

我目秋 寄風相聞

○ 月にみえぬ風にもかもや玉たれのとすのひまゆも妹がりゆかんを

初恋

あつすま厚田の渙のいさり火のほのみしこらに恋わたるかも

折句 かまつはた

かりにたにきてよとかもつし花花の成盃にたれ呼子鳥

涼

夏こへて夕方まけて海風なき粟手の浦し涼しかるかも

とこナガなつ

天つたふ入日さしぬれ七重花八重花咲り上庭のとこなつ

七月一日会セ夕歌

今けしもみこのまきはひせすらしも天安川天霧相みゆ

無心所着

むせし野の大川のへの安年の雲枝か下枝にあひきするあひ

彦星と棚機妻とを立入てよめと之

ゆきかいふに 大平ヨメズ

思ひわひこほしきからに天川いわたるによた名は立めると

霜

天の原ふり酒みれは見る月もいまたいらねはおける夕霜

鴨

暁の霜や身におくわたのそおきつふか魚に鴨羽さるも

帰雁

時もありて雁は越路に行ものよあかもふ君は帰り来よまぬ

古今集下句

年くるとむすほはれてし思ひもも春立けふの風やとくらん

此の六首
重複記
録古今集下句
席歌

老て今ヲ思ひそ思ふわがせかりこそとやいけんことしとやいけん
雁ノコトコノかねは帰る道ノ道にし立出てなけどもいまた雪はふりつ、

コト三首トモニ除クヘシ

席歌

あはともてつる取かくる梓ろ春と告める鶯の声

花も咲鶯ウ鳴キきノまギかスめリし比もかハれる夏ナツはキにケリ

世波ヨのあハみノ海ノ浦ノ名ノ鹿ノ鳴ノ秋ノはキにケリ

此三首もヨロシカラテ除ク可也

青

葉

大平云去月葉してトモマワシ
除スツヘシ

青葉して今イマはハ緑ノ系ノ桜ノ花ノしハなハけハはハ春ノやクるラし

梅ノ下ニ鶴ノのオりルるタ書タる屏風ニ

梅ノ花ノ白ハ春ノの難波ノ津ニ千ノ代トそハふサ戸ノたツのこゑ

名所冬

○ 神無月木ノのもみち葉ノ散過てまなく時雨ル音ノ聞ノ山

老

○ 老ラくノ春ノの雪段ニあハまウめニ還ラせリせハ文モ見マしを

紫川のうた

210 207 206 205

大平云
底はハち也るニ
アヲ大いかに山の
いかにせん高き
海なるとスヘシ

345 343 342

小萩々く紫川に秋きては流をとめて月やとるらん
置霜に草は皆から枯けて、紫川に氷るにけり
下へのみ思はくるし色に出て紫川に名は流してん
君か代は紫川の川水の絶すなかれて限しられす

貝名

名にしおふいかこの海のいかにせん深き底もかける秋風

野秋風

穂にしちふの野原は秋風のつはらにわたるちふの野原は

田秋風

松葉山嶺の秋風立わかれ林鹿の小田のせよかぬそちめき、

七

セウのうなのみす玉のみすまるや吹うかしかしぬ秋のはつ風

十首の中に

なほとあれとちきりしことを田跡川の滝つ瀬のことたゆと思ふな

大平云汝とわれトエラフモアレは汝ト我トをト云也此歌ニテハ
とハフロシ

巴次 690689

46/460459
大平除
ハ秋歌也

夷草 蒲

雨降りて浅沢沼の水を浅みまどひもやらす引あやめ鴨

物名ちやほに コノ歌ハキコエズサレドコノマニニ入置モヨシ
除ニモ不及 大平

秋風のつばら〜にそよきてはをの浅ちやほに出ぬし

同らうらやかく トカクツ字五ノ正シキ也ト
大平云

夕 綰 涼

衣イの紐ヌ夕タ去クくれはしめメのめに風打カゼふれて袂タビすくしも

大平云 百支衣もゆふくははトセンモヨカルヘシ
ノ 茨岳 コレニテハ近 蘇ノシラベ也

或人の求めによりてあみた仏てふたてめきの折句と作侍りし

東路のあかすの沼の芦の葉に山風さやきて秋は来にけり

水面に見えかくれする水草草も比白から秋はみと結とぎい

田跡川の滝つ河内の谷水はたえす乱る玉とこそみれ

布留の山林鹿の野への冬枯に古郷さむく吹あらしかな

津の国のつけ野に生る露路草の露路とよするに月ぞ宿れる

- 天の川水池さかまき立波の淵瀬もどけぬ妻むかへ舟
- 天雲の峯千にもまにも立覆ひふしの山へに積る白雪
- あひきする三津の浦わに旅わして更行夜半の露路にぬれつ
- ありてこそみつくしぬばめたわやめと二人わしよあつけの小枕
- 明暮にみれともあかす玉連二見の浦の釣の小ふねは
- 朝しものみけのさを橋たえすしてふみ通ひつゝ妻かりとはん

雁

大平云 仁徳記ノイシヤクハ行及一也イセクニアラヌ
ヨリテマアサソクニヤリ

ゆくそとそ宿りもとらて何をかもしかひいしく天つかりかね

江戸にて

そとにト云テハニほシトハイハス
とハ除ヘシ大平云

へなれりしいふさねとたに恨こしそとたに今はこほしくもあるか

四月十五日時田の主母のやまひめによりて尾張にゆくに
たらちねの母のやまひしうた
大平云 やまひはすへなトアレハやまひト云モ
ヒカコトナラス

安永五年丙 申六月十七日 兼てよめるなぬかのよのうた

○ 八千鎰の神のみより久方の天つしるしと

隔てたる天の安川小サ秋々く秋くる毎に

としのけに我は渡りぬ上つ瀬は波はもはやし

下つ瀬は石渚ふかしみつ栗の中つ淀瀬に

セにぬりのとふね受須衛玉巻の真梶し

しぬき豊けたの雲と帆にあけて只

渡りわたりそあか行妹にあはん為

けふな^をら^をて^を渡る日やある^{云々}

右風ニモキト也

寄風相聞

大平ハ点ナシ及岳ハヨロシ

○ 月にみえぬ風にもかもや玉たれのをすのひまゆも妹かりゆかんと

椿

大平

春さりくれば 秋さりくれば アレト 玉曼サリ

三雪ふる冬去来^{にしなれば}は足引の八尾の椿花咲にけり

二

本

示申 秋

植松茂岳夫人ハ本年秋としられたれと
あたらす 茂陰おもふに 神ノ字ならん

穴アナニヤシ二八スノコロ自凝島シマニ二真玉マタテ手乃玉テノ手指替ノ奈佐ナサ四シ
四大御神シ麻具波比乎ニハ鵲クサワリニ二クニ習八クニ氏国クニ
等ラ馬ウマシシ四カシコキ畏伎大御神 男神者 鳥二習八
四奴女神者 毛心豆加良叙持揚座監男
乎登言先立互 告ウラシシ四毛 天地乃 大奈須神隨
鴨少女乎登告鹿言波 天地乃教始米之
神カムナカ隨ナラシ奈良之 久方乃 天浮橋二伊立之互
美登能末具波比之大御神鴨

○ 二柱神乃御心悦互 国土盡宇美末之二計里
畏毛組戸二立之二柱神乃命社神者馬四計礼

◎ 二柱神乃命乃海座之八洲乃加良二今毛貴之
二神乃陰之湯之合之從毛妹背乃道乃学在良之

久方よみてやりし歌

はろくに来るしるしあり愛八師史トスヘシらうくたぬしくもあるか

君にあふらく後見ナトノ説ノ時代也トツアリケン其ヨシハ此時代イマダ

あへらくと云説は不知時代也 あふらくは實ハヒカコト也

サレハ此時代 あへらくと云「ワイヨリ」不知時代にあへらく

トシテハ後世人ヲ見テコレハ文化史見政時代ニ手ヲ

入ツヤト疑フヘシ依テ「虫トスルカ」上ニ去也ト

大平云フ

本居先生に奉る

虫成虫おほにつすのうしなるものを飯高の人とそ人ももとなのおもひし

大平云 秋津洲の大人トアリシ也 サレトアキツス

ト云ハヒカコトナレハ「虫トスルモヨカラシク」サレド

松坂ニテ「ナレハ大平ヨリ知レル」也コレハ字餘

ニテあきつしまの大人なる物とスヘシ 此句可
カロ「シカラヌ」永世ノ法トスヘシ歌也

○ 夏山になく時鳥忍あへずひねあへずにあへず今は五月となくほととぎす
難波津躰

梅の下に鶴つるのおりるるかた書あきたる
屏風に 大平云 除へき秋ニの花は科也 難波に
うめとよむは後世のー也

○ 梅の花白ふ春への難波津に千代ちよひをそよはふあしたつの声

旅宿名月

草枕古郷イカふる我宿わがしゆくに後ののちよみの月そ宿しゆくれる

名所 又、

○ 神無月木々のもみち葉散過はなぢりてまなく時雨ときりる、音聞ねきこの山

老

○ 老おいらくの春はるの霞あせにあなうめに四よ返かへらりせはあみもみまましと

鳥

名

鶺鴒ツツミ 鶺鴒ツツミ 鶺鴒ツツミ 鶺鴒ツツミ

高山たかみにたとりつきつつくく 岑つみの蝉せみとししそ思おもふ

大平云 鳥の中に蝉のアルモクケラシ
 せみとしそ思ふもせん方サケ也

みればとなくもあるかも
 鶺鴒

大平
イカ
カ
ナ
ル
ウ
ツ
セ

七
セツのうなかつ玉のみすまゝや吹うかしぬ秋の初風

初

冬
大平イマダシ

是も又目にはセやかにみえねども時雨る、音に冬しられけり

冬

夜

同
スカシロラス

枕へに衣おほへは跡よりすけきこくる風そ寒けき

離別旋頭歌

同
スカシカラス

立別ぶりそけみれはかきともる空取乱し浦がなしけく打なげくかも

用濁字歌

五月立けよこそはきけ時鳥垣はへたてす門ちかくして

けふこそは問くへき時か木伝ひて飛立さへくひとくくと

風ふけはすそ吹かへし立田川渚こそたきつかたへすくしき

晴

久方のちる雲もなき晴わたりまあとにみゆる天つ空かも

郡の歌

春立る時の氷は朝日影にほふかたよりまつとけにけり

松

とよけ木と名にこそたつ木の本に落葉たへせぬ松の下かけ

大平云 木の下に落葉絶せぬ松の木もかほらぬ

いろもとぎは也けるト云へハ瀬也 左ノ歌ノマ、

ニテハヒカクニシタ聞ユ 茂岳カタテモイカ、啓キテ可ナラン

善悪不二

大平タシカニ 不聞 ぎこそは過あすはまたこそけふのみや高きいやしきくるしかる見

千之此春みへたまはせりければ

頼こし春は暮にき田跡川の滝もや君を待つてあらん

若ゆてふ滝の白糸夜尽昼をわけてたのめし人とこそまで

63 八雲体

我宿の庭の山吹づく風に山吹ちらす其山吹と

大平云 神詠ハ西云の立悦玉ヲ也 コレハイトフ方也 躰ハ少シテ似タルに 意ハソムケリ

64 難波津躰

○ 夏山になく時鳥忍ひねに今は五月と鳴く時鳥

コレハヨロシ大平

65

山川にかけし柵紅葉はのちりおくなはりかけし柵

ノヨロシカラヌ大平

66

○ 足引の山のせとしか妻恋て鳴そきこゆる山のせと鹿

ハヨロシカラヌ大平

足引の山ほどきすたてぬけにおりけ(てなく山時鳥

ヨロシカヘリ 適当トモ不思ト大平云

67

文政六年八月十七日 見早 若山本居 (大平)

あしがき

・平成十五年秋名古屋の鈴木腹学会より研究誌「文莫第廿六号」刊行
「甲道全集」が発表される。それと得て町の公羽顕彰会として集の読解
試行が始まる。

・平成十六年十一月町民大学講座「甲中道磨と語る」に松阪本居宣長
記念館研究主任吉田悦之先生を迎える。

・更に十七年十二月十日町民大学講座に再度吉田先生を迎う。其の節
「今更に道磨全集と解説した人はない。ぜひ養老町でやしてほしい」との強
い励言を受ける。

・十八年三月九日松阪の記念館に吉田先生と訪ね、種々指導を受け、更に
山田隆氏の多年に亘る研究の貴重なノート二冊の借用と受ける。

・この貴重なノートと文莫第廿七号「尾張先進歌集田中道磨全集」
を頼りに原文筆字につとめる。

以上簡単に経緯と記しました。精神的にも健康的にも自信のもてなくなりまして今日一応の纏めとする事にいたしました。

完全ではありませんがこれまで出来ましたのは、吉田・岩田両先生の篤いご指導の援助、又文藝誌の方を以て借り得たからの事でありまして、若しどの一つでも得る事が叶いませんでしたならば困難な途は乗り切れなかつたであります。今更な有難いめぐりあわせを感戴しましたこと厚く御礼申し上げます。これから公羽のつたを通しての尊い生き姿に少しでも深くふれるべく、又一人でも多くの人に伝えよう努力としていきたいと願ふものです。

平成十九年七月

養老町田中道麿公羽顕彰会

副会長山口一易記

原文筆写 草稿

田中道全集

発行 平成十九年十月四日

発行者 田中道磨翁顕彰会

養老町教育委員会

印刷 サンメッセ株式会社